

福岡市埋蔵文化財調査報告書第321集

立花寺 2

—第2次調査報告—

1993

福岡市教育委員会

立花寺 2

—第2次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第321集



1993

福岡市教育委員会



調査区遠景



第141号柱穴出土越州窑青磁皿



出土越州窑青瓷碗



出土越州窑青瓷皿



出土二彩



出土綠釉陶器



出土綠釉陶器



出土綠釉陶器

序

古くから大陸文化受窓の門戸として栄えてきた福岡市内には、多くの遺跡が分布しています。本市では、特に文化財の保護・活用に努めてきていますが、市内の都市基盤整備事業や各種の開発事業によって失われる遺跡については、記録保存のための発掘調査を行なっています。

本書は、博多区大字金隈字隈ノ下の共同住宅建設に先だって発掘調査を実施いたしました立花寺遺跡第2次調査の報告書です。

発掘調査の結果、古墳時代の竪穴式住宅址、古代の建物群などの遺構を検出し、貴重な資料を得ることができました。

株式会社西興住宅、城南ハウス株式会社をはじめとする関係各位のご協力に対し、感謝の意を表しますとともに、本書が文化財理解の一助となり、広く活用されることを願っております。

平成5年1月

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

例　　言

1. 本書は、博多区大字企限字限ノ下959外の株式会社西興住宅、城南ハウス株式会社による共同住宅建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、1990年9月から12月にかけて発掘調査を実施した立花寺遺跡第2次調査の報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は、山口謙治、高田一弘、石本恭司、大家恵治、祠崇、柳澤竜広、上島茂樹、後藤和武、井手かすみ、尾崎君枝、平賀田喜子、坂井昭美、星子輝美、山口朱美があたった。
3. 本書使用の遺物実測図は、龟井明徳、平川敬治、加藤隆也、加藤周子があたった。
4. 本書使用の写真は、遺構を山口謙治、遺物を平川敬治があたった。
5. 本書使用の図面の製図は、山口謙治、太田明了、山口朱美があたった。
6. 本書使用の方位は磁北である。
7. 本書の執筆は、結章の出土陶磁器については龟井明徳が、その他の執筆・編集は山口謙治が行なった。
8. 本調査の出土遺物および記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

本文目次

第1章 序説

1. はじめに.....	1
2. 調査体制.....	1
3. 遺跡の位置と立地.....	5
4. 本調査地周辺の調査.....	6

第2章 調査の記録

1. 調査の概要.....	7
2. 第1・2面の調査.....	9
3. 第3面の調査.....	60

第3章 結章

1. 出土陶磁器について..... (亀井明徳)	67
2. 立花寺遺跡第2次調査から..... (山口讓治)	72

挿図目次

Fig. 1 作業風景	2
Fig. 2 立花寺遺跡と周辺の遺跡	3
Fig. 3 立花寺遺跡調査地と周辺遺跡の調査区	4
Fig. 4 調査区近景（北から）	5
Fig. 5 調査地点地形実測図	8
Fig. 6 遺構分布図	折り込み
Fig. 7 第1・2面遺構分布状況	9
Fig. 8 第1号土壙出土遺物	10
Fig. 9 第1・2号土壙（SK-01・02）実測図	10
Fig. 10 第1・2号土壙完掘状況	11
Fig. 11 第4号土壙出土遺物	11
Fig. 12 第3・4号土壙出土遺物実測図および第3号土壙出土遺物	12
Fig. 13 第5号土壙出土遺物	13
Fig. 14 第101～103・105号掘立柱建物平面実測図（SB-101～103・105）	14
Fig. 15 第101～103・105号掘立柱建物	15
Fig. 16 第101～103・105号掘立柱建物出土遺物	16
Fig. 17 第104号掘立柱建物群（SB-104）平面実測図	17
Fig. 18 第104号掘立柱建物群（西から）	18
Fig. 19 第104号掘立柱建物群出土遺物	19
Fig. 20 各柱穴出土遺物実測図(1)	20
Fig. 21 各柱穴出土遺物(1)	21
Fig. 22 各柱穴出土遺物(2)	22
Fig. 23 各柱穴出土遺物(3)	23
Fig. 24 各柱穴出土遺物(4)	24
Fig. 25 各柱穴出土遺物(5)	25
Fig. 26 第10号柱穴（SP-010）実測図	26
Fig. 27 第140・141号柱穴（SP-140・141）実測図	26
Fig. 28 第101号柱穴遺物出土状態および出土遺物実測図	27
Fig. 29 第141号柱穴出土遺物(1)	28
Fig. 30 第141号柱穴出土遺物(2)	29

Fig.31 各柱穴出土遺物実測図(2).....	30
Fig.32 各柱穴出土遺物(6).....	31
Fig.33 各柱穴出土遺物(7).....	32
Fig.34 各柱穴出土遺物(8).....	33
Fig.35 各柱穴出土遺物(9).....	34
Fig.36 各柱穴出土遺物実測図(3).....	35
Fig.37 各柱穴出土遺物(10).....	36
Fig.38 各柱穴出土遺物(11).....	37
Fig.39 各柱穴出土遺物(12).....	38
Fig.40 各柱穴出土遺物(13).....	39
Fig.41 各柱穴山土遺物(14).....	40
Fig.42 各柱穴出土遺物(15).....	41
Fig.43 各柱穴出土遺物(16).....	42
Fig.44 各柱穴出土遺物(17).....	43
Fig.45 各柱穴出土遺物(18).....	44
Fig.46 第1面検出時出土遺物実測図(1).....	45
Fig.47 第1面検出時出土須恵器壺蓋.....	46
Fig.48 第1面検出時出土須恵器壺身(1).....	47
Fig.49 第1面検出時出土遺物実測図(2).....	48
Fig.50 第1面検出時出土須恵器壺身(2).....	49
Fig.51 第1面検出時出土遺物実測図(3).....	50
Fig.52 第1面検出時出土須恵器その他(1).....	51
Fig.53 第1面検出時出土須恵器その他(2).....	52
Fig.54 第1面検出時山土遺物実測図(4).....	53
Fig.55 第1面検出時出土土器(1).....	54
Fig.56 第1面検出時山土土器(2).....	55
Fig.57 第1面検出時出土土器(3).....	56
Fig.58 第1面検出時出土土器および石鍋(4).....	57
Fig.59 第3面遺構分布状況.....	58
Fig.60 第6号竪穴式住居址(SC-06)実測図.....	59
Fig.61 第6号竪穴式住居址発掘状況.....	60
Fig.62 竪穴式住居址出土土器実測図.....	60
Fig.63 各竪穴式住居址出土遺物.....	61

Fig.64 第3面各造構出土遺物	62
Fig.65 第3面検出時出土遺物実測図	63
Fig.66 第3面検出時出土土器	64
Fig.67 その他の出土遺物	65
Fig.68 出上越州窯青磁・邢州窯白磁	66
Fig.69 出土青白磁実測図	67
Fig.70 出土綠釉陶器および白磁	68
Fig.71 出土青白磁(1)	69
Fig.72 出土青白磁(2)	70
Fig.73 出土権杖測図	72

卷頭図版

1. 洪佐区遠景
2. 第141号柱穴出土越州窯青磁皿
 - 出土越州窯青磁碗
 - 出土越州窯青磁碟
3. 出土二彩
 - 出土綠釉陶器

第1章 序 説

1. はじめに

博多区大字金隈字隈ノ下959外に、株式会社西興住宅、城南ハウス株式会社による共同住宅の建設が計画された。この地は、立花寺遺跡の中央部に位置している。共同住宅の計画者である株式会社西興住宅、城南ハウス株式会社より、福岡市教育委員会埋蔵文化財課（以下、埋文課とする）に遺跡有無の確認が依頼された。

試掘調査の依頼を受け、市埋文課は1990年7月24日に試掘調査を実施した。踏査およびトレーニング調査を実施した結果、中世・古代・古墳時代の土壌・竪穴式住居址・柱穴などの遺構が検出されるとともに、多量の遺物が出土した。試掘調査の結果から、埋文課は谷部は遺構は無いが、丘陵上には古墳時代から中世の遺構が少なくとも3面にわたって遺存しているとして、計画地のうち1,145m²については保存するか、本格的な発掘調査が必要であると決定した。以上の決定を受け、埋文課と共同住宅建設計画者は協議を重ねたが、現状保存は困難であり、止むを得ず記録保存のための調査を実施することとなった。

以上の調査決定を受け、調査費・調査期間・出土遺物の扱いなどについて協議に入り、それぞれの契約事項がととのい、調査契約が成立した。

本調査は、調査事務所用ブレハブの設置、農地耕作者の承諾を得た後、各時代・各時期の様相把握を目的として、約3.5ヶ月にわたって実施した。

遺跡調査番号	9035	遺跡略号	RGG-2	分布地図番号	011-Δ-2
調査地地籍	博多区大字金隈字隈ノ下959・960・967、字光明寺955				
開発面積	2,595.72m ²	調査対象面積	1,145m ²	調査実施面積	1,002m ²
調査期間	1990年9月17日～同年12月25日				

2. 調査体制

調査体制として、以下に示す組織を構成しました。緊急調査のため充分なる体制を組むことができませんでしたが、株式会社西興住宅、城南ハウス株式会社をはじめとする関係各位の協力のもとに、発掘調査は進行し、終了することができました。整理報告作業は、調査担当である山口の業務繁多から必ずしも順調に進行したとはいませんが、報告書を発行することができました。関係各位のご協力に謝意を表します。また、厳冬下の降雨、雪にもかかわらず、調査作業に従事していただきました作業員各位に心からお礼申し上げます。

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課第二係
教育長 井口雄哉 文化財部長 花田允一
埋蔵文化財課長 折尾学 第2係長 塩屋勝利

調査担当 山口讓治
試掘調査担当 横山邦繼（主任文化財主事） 吉留秀敏 濑本正志
調査・整理補助員 高田一弘 平川敦治 加藤隆也 加藤麗子 犬丸陽子 山口朱美
調査・整理協力者 亀井明徳（専修大学教授） 大塚恵治（現八女市教育委員会）・石本恭司・岡崇・後藤和武・上畠茂穂・柳澤竜広・清川朋和（以上、福岡大学歴史研究部） 小川勝彦 尾崎君枝 甲斐田嘉子 板井昭美 星子輝美 平野徳子 太田明子 神谷玲子 品川伊都子 西野敦子 矢川みどり 亦星攝 有吉千栄子 池田礼子 大久保沙波 吉良山益美 佐々木美子 進藤順子 武田祐子 松下節子



Fig. 1 作業風景



Fig. 2 立花寺遺跡と周辺の遺跡



Fig. 3 立花寺遺跡調査地と周辺遺跡の調査区

3. 遺跡の位置と立地 (Fig. 2 + 3)

福岡平野の東部には、多々良川流域に柏屋平野が広がり、その西には、福岡平野との分水をなす月隈丘陵が四王寺山から北西方向に低くなりながら延びている。月隈丘陵は、標高100~200m程度で、東西斜面は開析作用が著しく、丘頂部が独立丘状をなすところ、浅い鞍部によって連続する舌状の丘陵をなす地形が顕著である。月隈丘陵の頂部や、やや緩やかな丘陵地、独立丘には多くの各時代、時期の遺構が分布している。立花寺遺跡群もそのひとつで、月隈丘陵西斜面の標高20~30mの丘陵に位置している。現在、月隈丘陵の東西斜面は宅地化が低地から丘陵地へ、北西方向から南東方向へと延びつつある。立花寺遺跡群周辺でも同様のことかえるが、まだ果樹園を主とした畠地が多い。

本調査地は、博多区大字金隈字隈ノ下959外の地籍で、立花寺遺跡群の南東部に位置し、標高26m前後にあたる。国土地理院発行の5万分の1地形図(福岡)の北から27.2cm、東から4.8cmの位置にあたる。

周辺では、立花寺遺跡第1次調査、下月隈13遺跡、天神森遺跡、上月隈遺跡、金隈遺跡などの調査が実施されている。立花寺遺跡第1次調査地は、本調査地の50m前後西にあたる。



Fig. 4 調査区近景（北から）

4. 本調査地周辺の調査 (Fig. 2・3)

立花寺遺跡群では、市道建設に先だって1988年第1次調査が実施されている。調査においては、弥生時代中期後半の土壙と自然流路？と考えられる各時代の溝が検出されている。出土遺物としては縄文時代の石匙・石鎌、弥生土器、蛤刃石斧、古墳時代後期の須恵器、古代の須恵器・土師器・瓦類、中世の土師器・青磁などがある。注目できる遺物としては、古代の瓦類がある。

本調査地周辺では、北北西1km前後の下月限B(下月限宮ノ後)遺跡⑧、天神森(下月限天神森)遺跡⑨、上月限遺跡⑩、南400m前後の金隈遺跡、南南東500mの金隈上屋敷、750m前後の影ヶ浦遺跡(古墳群)、南東1km前後の堤ヶ浦古墳群などの調査が実施されている。いずれも標高15~30mの独立丘状か緩やかな丘陵に立地している。

以上の立花寺遺跡群周辺の調査では、縄文時代の石鎌などの石器は単発的に出土しているものの、同時代の造構や良好な包含層は未検出である。造構が検出できるようになるのは弥生時代前期後半からで、影ヶ浦遺跡では袋状堅穴からなる貯蔵穴群が検出されている。同時期の貯蔵穴群は、月限丘陵では、中寺尾遺跡・宝満尾遺跡など約2.5~3kmの間隔で分布している。また、前期末から中期になると金隈遺跡・金隈上屋敷遺跡、下月限B遺跡、天神森遺跡、上月限遺跡などで豪華墓を主体とする墓地群が検出されている。これらの墓地群は、金隈遺跡から席田青木遺跡にかけて月限丘陵に派生する標高15~25mの舌状台地に所在している。弥生時代の居住造構は月限丘陵の北西端部周辺に位置する久保園遺跡で検出されているが、月限丘陵の南部では確認されていない。月限丘陵の中央部から南部にかけては前述したように、袋状堅穴からなる貯蔵穴群と墓地群があり、一見異なった領域をもつようなあり方を示している。また、居住造構の未検出は、月限丘陵裾部から低地の調査が行われていないことに起因しているが、このような状況下で立花寺遺跡群では、土壙が検出されていること、墓に使用される變形土器がないことなどから集落遺跡の可能性があるといえよう。

古墳時代の後半期になると、金隈遺跡・影ヶ浦古墳群・席田の各古墳群など小規模の古墳群と堤ヶ浦古墳群・特田ヶ浦古墳群・御領古墳群など大規模な群集墳が出現する。月限丘陵の西北部は小規模、中央部から南部にかけては大規模な群集墳と好対称をなしている。居住遺構は弥生時代とはほぼ同じことがいえよう。

奈良時代から平安時代の造構は、本調査で確認でき、同時代の比較的まとまった遺物が出土している。これまで月限丘陵に所在する各遺跡で遺物は出土していたものの造構は点的なあり方であった。このような状況下での第1次調査での瓦類の出土、本調査地での掘立柱建物群の分布状態、越州窯青磁・綠釉陶器など一般集落でみられない遺物の出土は、本調査地周辺に寺院・官衙もしくは豪族の居館の所在を示しているものといえよう。

第2章 調査の記録

1. 調査の概要 (Fig. 5 ~ 7)

共同住宅建設予定地は、開析谷（標高22m前後）と丘陵平坦地（標高26m前後）からなり、谷部は荒地、丘陵平坦地は果樹園として利用されていた。埋文課による踏査および試掘調査によって、調査対象地は丘陵平坦地に決定していた。調査対象地は、南側は崖状をなした谷、北側および西側は造成地、東側は果樹園に囲まれ、東西に長い台形状をなし、南へ緩く傾斜している。試掘調査の結果、現地表下50~60cmで遺構面となると推定できたため、調査対象地全域の調査をめざした。しかし、北側は造成間もない塙壁があること、東側の果樹園との境は70cm前後の段差があること、崖側にあった1m前後の道路をすべて調査対象地としたことから西から東へぬける切り替え道路が必要なことなどから、東・北・西側を1m前後引きを取り調査区とした。

調査は、10~50cmの耕作土を重機を使用し除去することから始めた。その結果、北側は地山である花崗岩礫乱土面で、その南側の東側は、黄灰色から暗褐色土、中央部は暗灰色土、西側は暗灰色から黄褐色・黄茶褐色をなす整地面で遺構が検出できた（標高24.5~26.2m）ので、これを第1面とした。しかし、整地面では、遺構の平面形が不明瞭なため、約20cm前後掘削し第1面の遺構の検出作業を行なった。以下、南側では第1面下80cm前後まで5枚の整地面を検出したが、第1面下30cm前後の褐色粘質土上面を第2面とし、第2面下80cmの黄褐色粘質土上面を第3面として調査を実施した。第3面とした黄褐色粘質土も整地層の可能性があり、下部に遺構が遺存している可能性があったが、調査期間の関係で調査を断念した。調査区の東側は、第1・2面に分けて調査を実施し、西側は第1面での遺構検出が困難なため、第2面で東側の第1・2面に対応する遺構群の調査を行なった。本書では第1・2面の遺構として図化した(Fig. 6の等高線は、東側では第1面、西側では第2面である)。なお、第3面の調査はまず、調査区の東側から20m間隔で幅2mで南北の調査溝を3本設定した。その結果、中央部から西側で遺構が検出できたので、西側の約500mを調査対象とした。また、東側調査溝は当然ながら、中央部調査溝でも、古墳時代後期以前の遺構は地山の花崗岩礫乱土中で検出できなかった。

検出遺構としては、掘立柱建物・竪穴式住居址・溝・上塙・柱穴がある。検出遺構は掘立柱建物をSB、竪穴式住居址をSC、溝をSD、土塙をSK、柱穴をSPと遺構記号を使用した。なお、掘立柱建物と柱穴を除いた遺構は、検出順に遺構記号の後に2桁の通し番号を付した。また、掘立柱建物は確認順に記号の後に101から、柱穴は検出順に記号の後に3桁の通し番号を付した。本書では、遺構名と遺構記号は併記する。

出土遺物は、9035の遺跡番号の後に5桁の通し番号を付し登録番号とした。本書では、遺構ごと、検出面ごとに通し番号を付した。

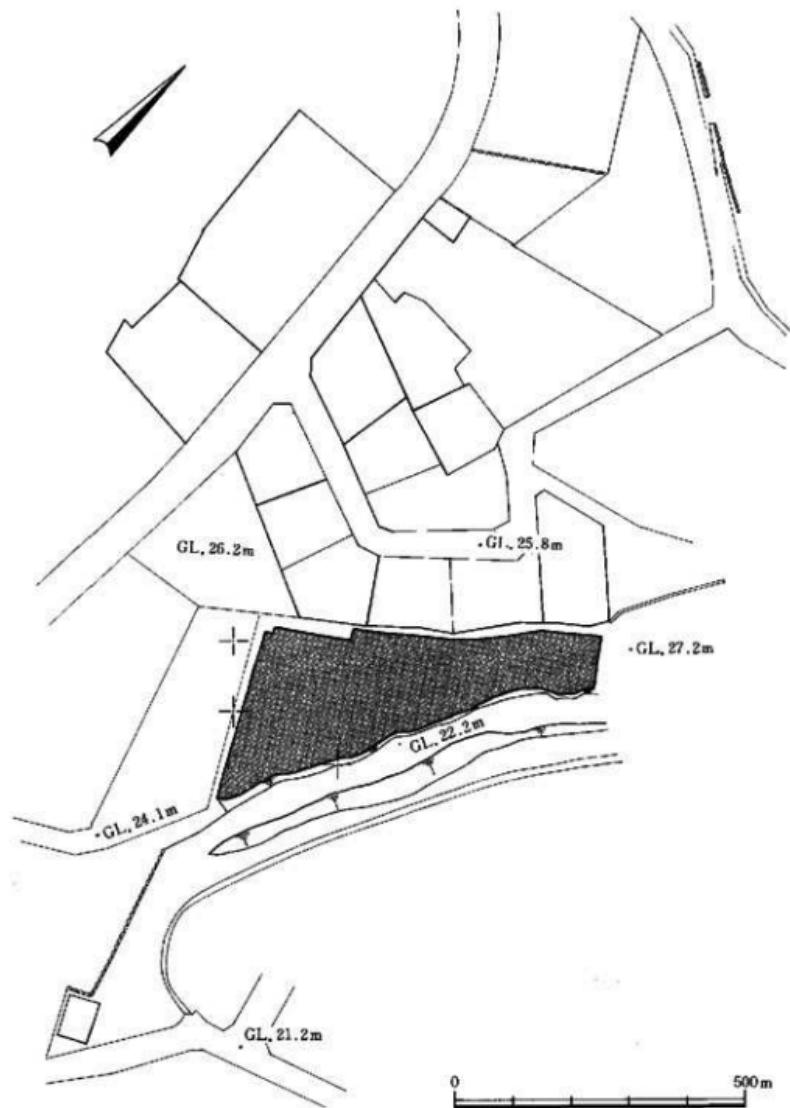


Fig. 5 調査地点地形実測図



Fig. 6 遺構分布図

2. 第1・2面の調査

第1面は、調査区の北側では地山である花崗岩煤乱土面であり、その南側の大部分は、整地層面であり、調査区の東側・中央部・西側と大きく土色・土質とも異なっている。そのため、西側では遺構の平面形が不明瞭であり遺構検出が困難であった。調査においては15~50cm前後掘削し、遺構検出を行なった。このため、調査区の中央部から西側は第1面と第2面の遺構を同時に検出したことになる。調査区の東側では、地山面が比較的広く整地面も黄灰色を呈し遺構検出が容易であった。第1・2面検出の柱穴のうち、SP-219~492は第1面の柱穴と限定できる。なお、第2面の柱穴として限定できるものは、SP-601~678である。その他の柱穴は、出土遺物で時代・時期を限定する必要がある。

第1・2面検出遺構としては、土壙5基（SK-01~05）と掘立柱建物5棟（SB-101~105：SB-104は1棟として）、溝3条、柱穴多数がある。

第1面は、標高24.2~26.2mと南へ緩く傾斜している。第2面になると調査区東側では地山整形が施されて平坦面を造りだし、掘立柱建物群が営まれたと考えられる。

第1・2面での出土遺物は、柱穴や整地層から出土し、須恵器、土師器、青磁、白磁、綠釉陶器や椎や土鍤などの土製品、紡錘車などの石製品、瓦類がある。出土遺物は、奈良時代から平安時代のものが主体をなしている。つぎに多い時期は古墳時代末期のもので、中世の遺物も少量出土している。

以下、検出遺構・出土遺物については、実測図および図版で紹介していくことにする。

1) 土壙と出土遺物 (Fig. 8~13)

本調査区では5基の土壙を検出した。5基のうち3基は、焼土壙（SK-01・02・04）である。SK-01・04は平面形隅丸方形を呈し、SK-02は円形を呈する。

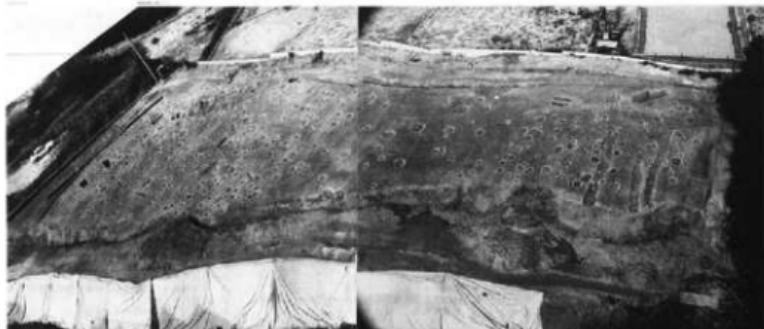


Fig. 7 第1・2面遺構分布状況

SK-01は長軸1.25m、短軸1mで、35cm前後遺存している。床面はほぼ平坦で、壁は緩く立ち上がっている。壁および床面は焼けて赤褐色を呈し、厚さ2cm前後の炉壁状をなしている。覆土としては粘質のない土で、炭化物を含んでいる。覆土内には焼土・灰層はない。出土遺物としては、高台付環と土師器の細片がある。以上のことから、本焼土壙は8世紀前半頃のものか (Fig. 8~10)。

SK-02は径80cm前後で、7cm前後遺存し皿状をなしている。床面は焼けて赤褐色を呈し、厚さ3cm前後の炉体状をなしている。覆土はわずかであるが、炭が多量に含まれ、5cm前後の層をなしている。本焼土壙からは鉄滓1点が出土したが、本遺構に関連するか否かは不明である (Fig. 9~10)。

SK-04は本来、SK-01と同形態をもつと考えられるが、長軸1.4m、短軸90cmの平面形椭円形を呈し、10cm前後遺存しているのみである。床面はわずかに皿状をなし、焼けて赤褐色を呈



Fig. 8 第1号土壙出土遺物

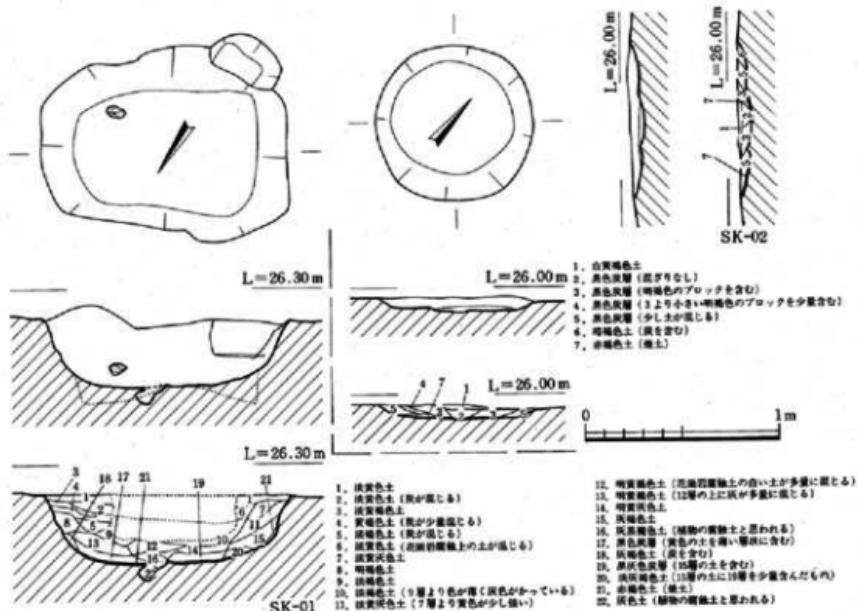


Fig. 9 第1・2号土壙 (SK-01・02) 実測図

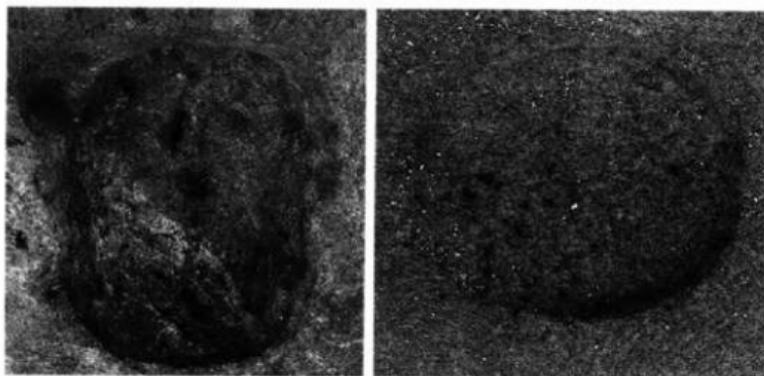


Fig.10 第1・2号土壌元掘状況

し、厚さ1cm前後の炉壁状をなしている。本焼土壌からは須恵器の壺蓋(無返し)、土師器の甕と鉄製刀子が出土した。以上から、8世紀前半のものといえよう(Fig.11・12)。

SK-03は長軸3.3m、短軸1.8m前後の平面形楕円形を呈する土壌で、30cm前後遺存している。床面は皿状をなし、壁はほぼ直に立ち上がり、暗褐色から暗灰褐色土を覆土としている。本土壌からは須恵器の壺蓋(1・2)・高台付碗(4)、綠釉陶器の皿(3)や土師器の甕・高台付碗などの細片が出土した。本土壌は切り合い関係および出土遺物から、平安時代前半期のものといえよう(Fig.12)。

SK-05は
径1.3m前後
の円形を呈し、
20cm前後遺存
している。床
面はほぼ平坦
で、壁は直に
立ち上がって
いる。出土遺
物としては、
土師器の甕・
壺・黑色土器、
製塙土器、須
恵器の細片が
ある(Fig.13)。

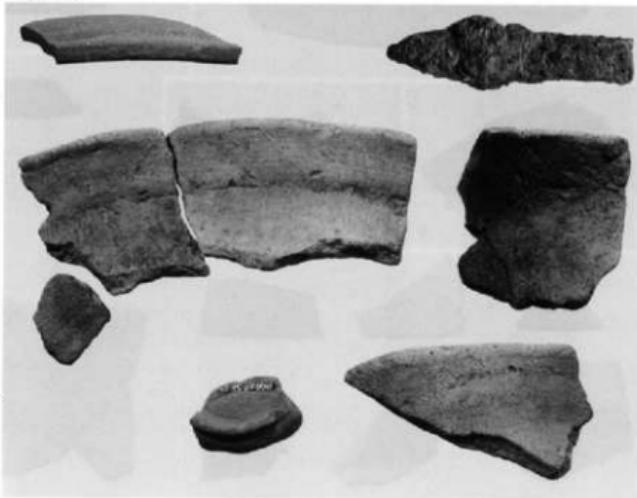


Fig.11 第4号土壌出土遺物

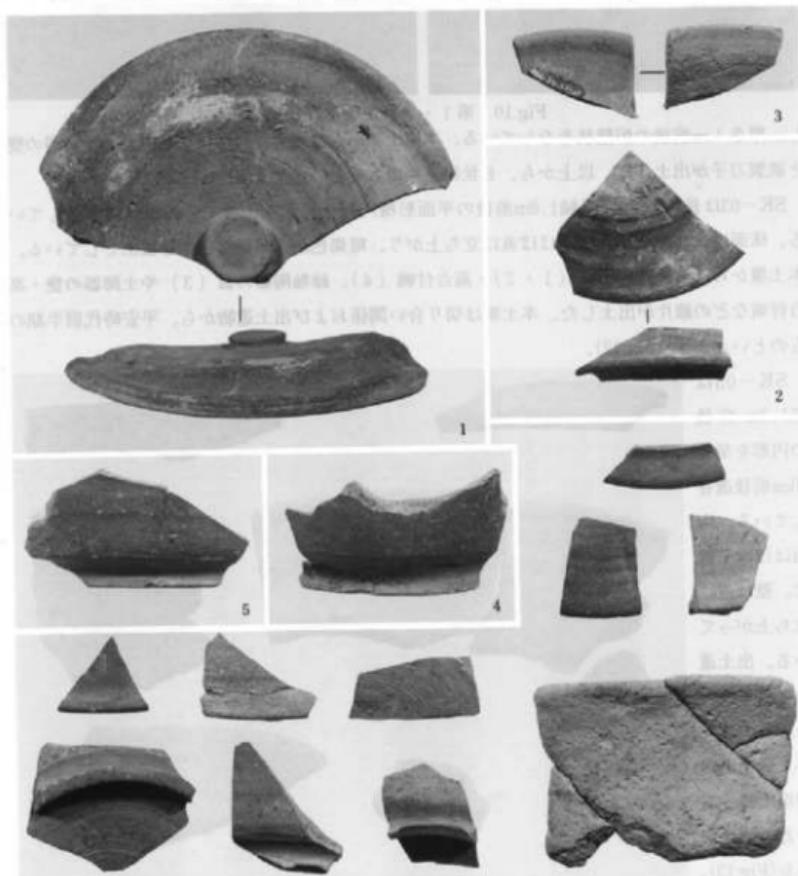
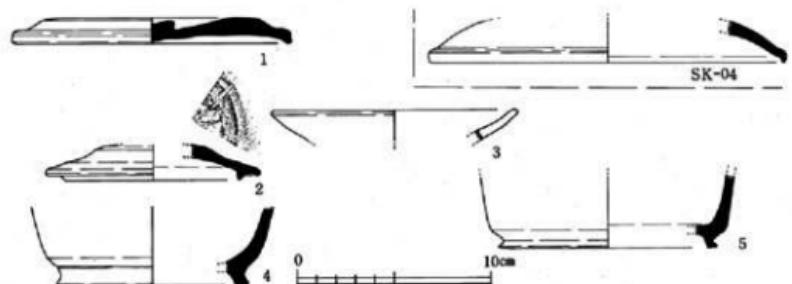


Fig.12 第3・4号土壤出土遺物実測図および第3号土壤出土遺物

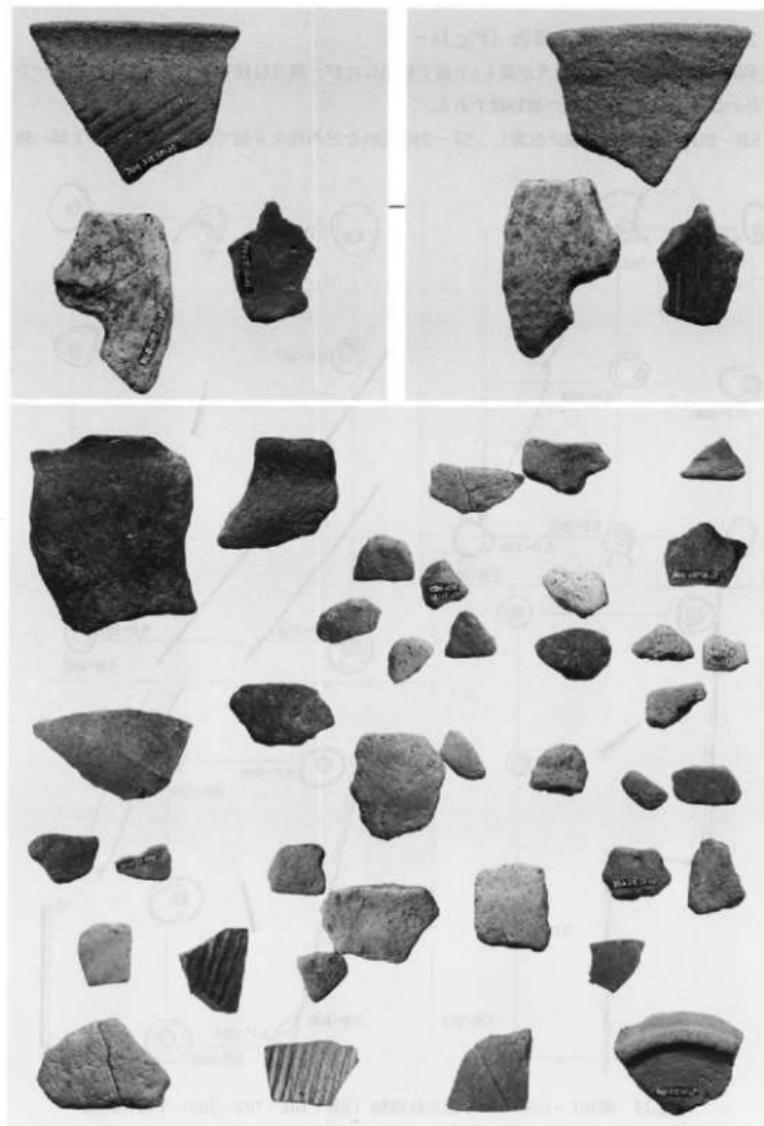


Fig.13 第5号土壤出土遺物

2) 掘立柱建物と出土遺物 (Fig.14~19)

本調査区では約800個の柱穴が第1・2面で検出したが、掘立柱建物としてまとめたのが
きたのは4棟の建物と1棟の建物群である。

SB-101は調査区の東側に位置し、SP-280・281などの柱穴9個で構成される2×2間の紺

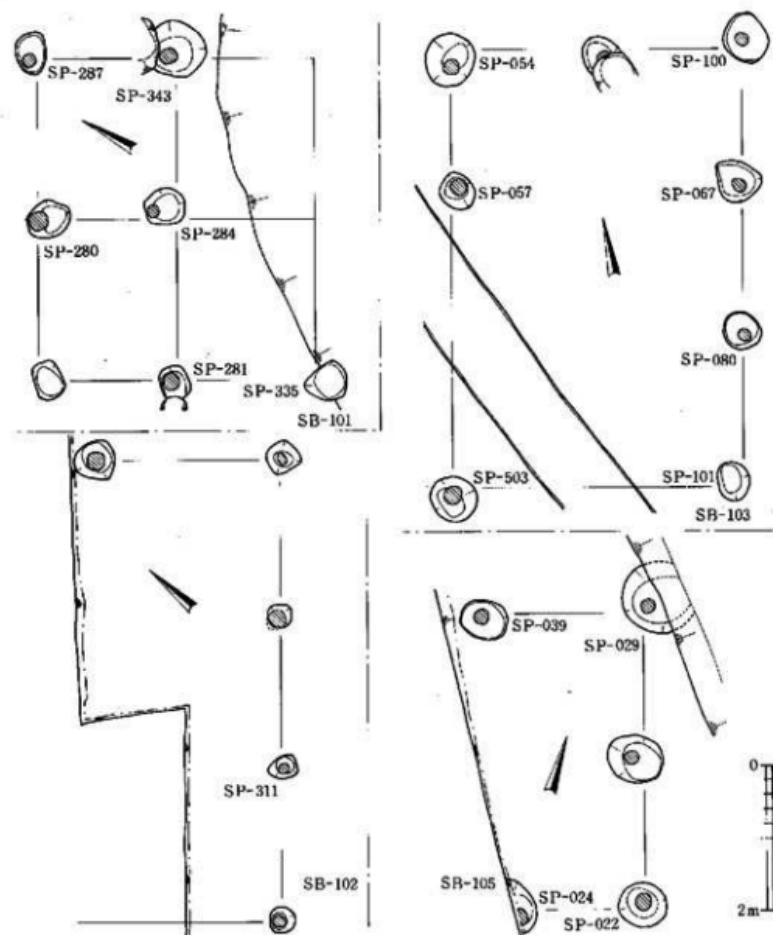


Fig.14 第101~103・105号掘立柱建物 (SB-101~103・105) 平面実測図

柱の建物と考えられるが、柱穴1個は後世の谷の開析によって消失している。柱穴は一辺50~80cmの隅丸方形を呈する掘り方をもち、40~60cm遺存し、柱痕跡から径20cm前後の柱を用いたと考えられる。本建物の柱間は2.2m前後でN-30°-Eの方位をとっている。SP-281から鉄滓、SP-287から土師器の环と須恵器の碎片が出土した。古代の倉庫か。(Fig.14~16)

SB-102は調査区の西北部に位置し、桁行3間と梁行1間分の5個の柱穴を検出したが、北の調査区外へ延びている。3×2間の建物か。桁行6.4m、梁行の柱穴間は2.6mで、N-50°-Eの方位をとっている。柱穴の掘り方は40cm前後の隅丸方形を呈し、40~70cm遺存している。柱痕跡から径18cm前後の柱を用いたと考えられる。SP-311から土器の細片が出土した。SB-104とはほぼ同じ方位をとることから、8世紀前半頃のものか(Fig.14~16)。

SB-103は調査区の西側に位置し、桁行3間、梁行2間の10柱穴から構成される調査の建物である。桁行6m、梁行4mで、N-9°-Eの方位をとっている。柱穴掘り方は径60cm前後の円形を呈し、30~50cm前後遺存し、柱痕跡から18cm前後の柱を用いたと考えられる。SP-054・100・101・103から少量の土師器环、須恵器などの細片と滑石製石鍋片が出土した。ほとんどの柱穴を切っており、平安時代後半期のものか(Fig.14~16)

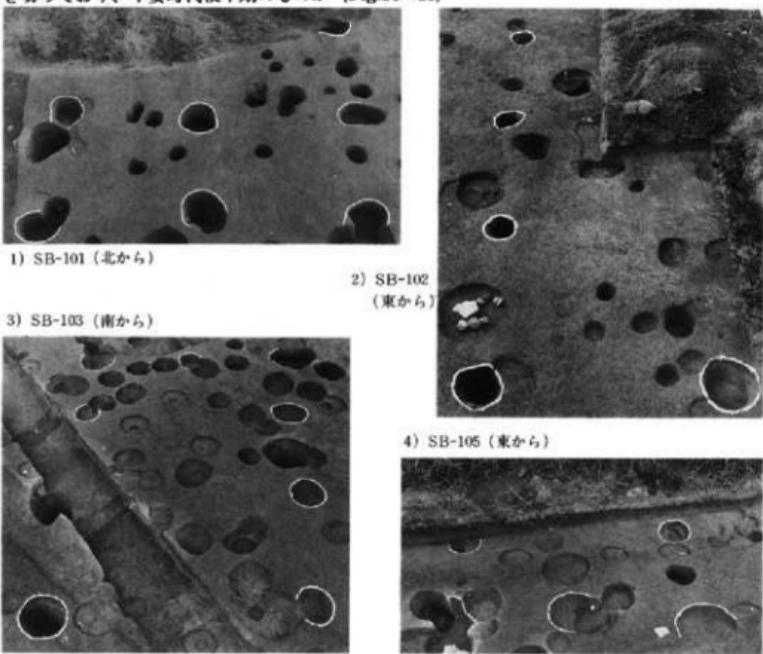


Fig.15 第101~103・105号掘立柱建物

SB-105は調査区の西側に位置し、桁行2間、梁行1間分の5柱穴を検出した。1×2間の建物の可能性もある。西側が調査区外へ延びているので規模はわからない。梁行の柱間は2.3m、桁行の柱間は2.1mで、径70cm前後で30cm前後遺存の掘り方をもっている。柱痕跡から径20cm前後の柱を用いたと考えられる。SP-026・029・034から少量の須恵器壊蓋などの細片が出土したが、切り合ひ関係から平安時代後半期のものと考えられる (Fig.14~16)

SB-104は当初、SP-233・323・542・580など14柱穴から構成される桁行5間、梁行2間の側柱の建物としていたが調査進行過程でN-53°~54°-Eの方位をとる2×2間の総柱建物群と二重の櫛列から構成される建物群とした。総柱建物群は東からA・B・C棟とした。A棟の柱間は2.7mで、径60cm強、70cm前後遺存の円形の掘り方をもち、柱痕跡から25cm前後の柱を用いたと考えられる。B棟の南北柱間は3.1m、東西柱間は2.5m、径60cm前後、40~50cm遺存の円形の掘り方をもち、柱痕跡から20cm前後の柱を用いている。C棟の柱間は1.2~2mと東西方向で異なる。しかし、柱筋はA棟から揃っているので総柱の建物とした。径60cm前後で40cm前後遺存の円形の掘り方をもち、柱痕跡から20cm前後の柱を用いたと考えられる。A・B・C棟から南に3.7m離れて2.1mの間隔をもつ2条の櫛列がある。櫛列は8間分検出し、2.3~3mの柱間隔をもっている。径40~60cmで40cm前後遺存する掘り方をもち、柱痕跡から15cm前後の柱を用いたと考えられる。櫛列はN-49°-E、A棟はN-53°-E、B・C棟はN-54°-Eの方位をとっている。これ

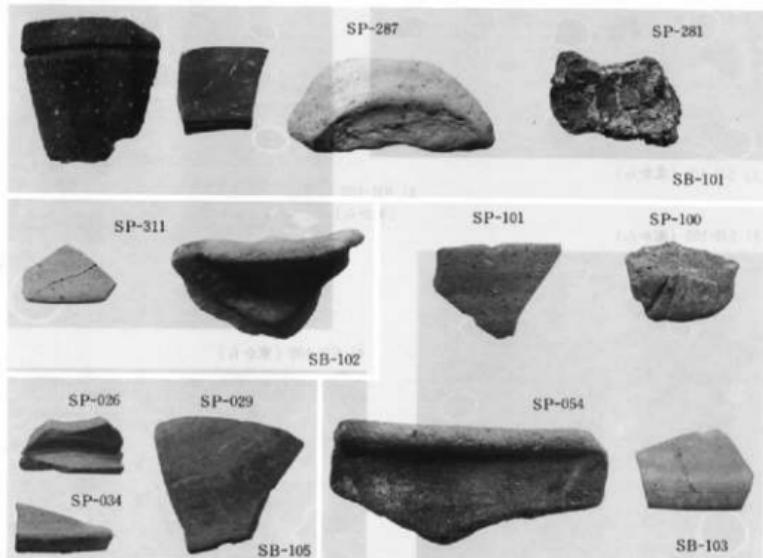


Fig.16 第101~103・105号掘立柱建物出土遺物

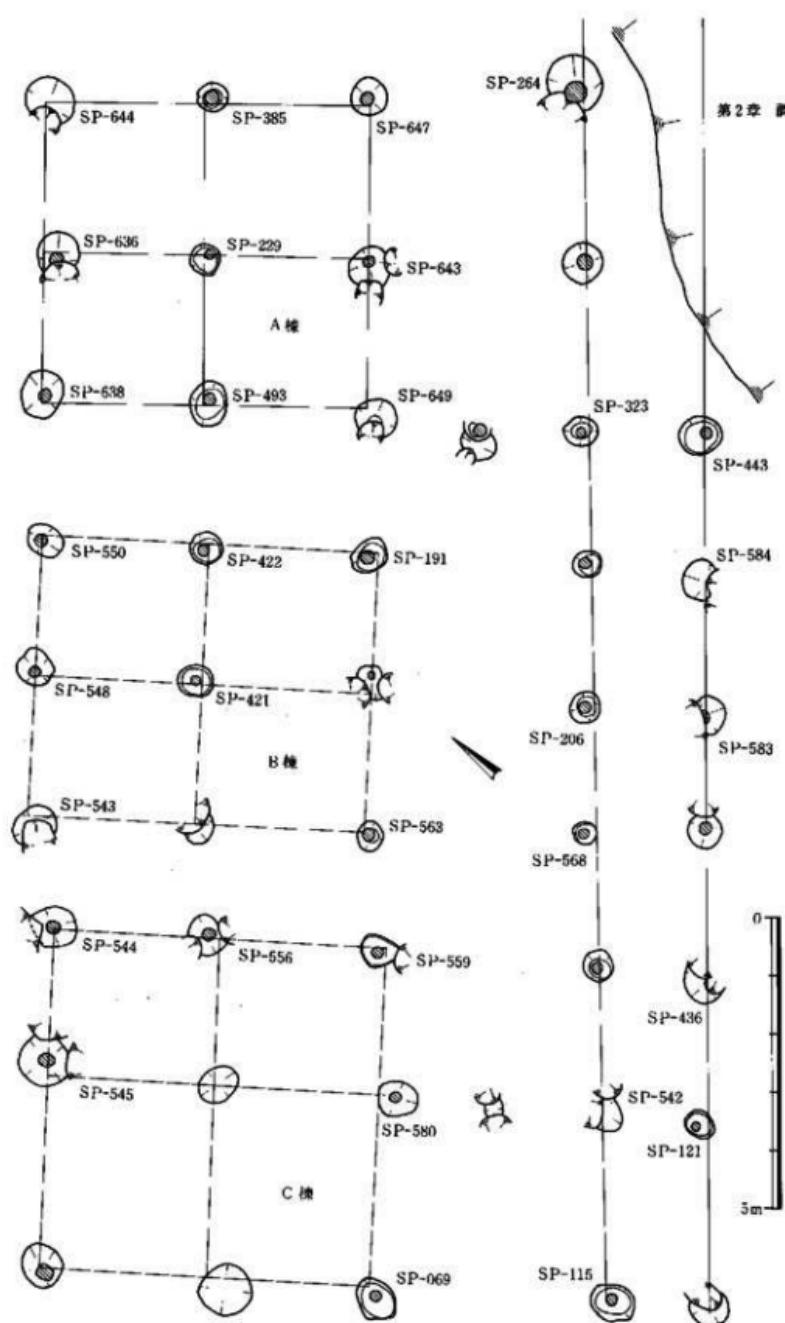


Fig.17 第104号掘立柱建物群 (SB-104) 平面実測図



Fig.18 第104号掘立柱建物群（西から）

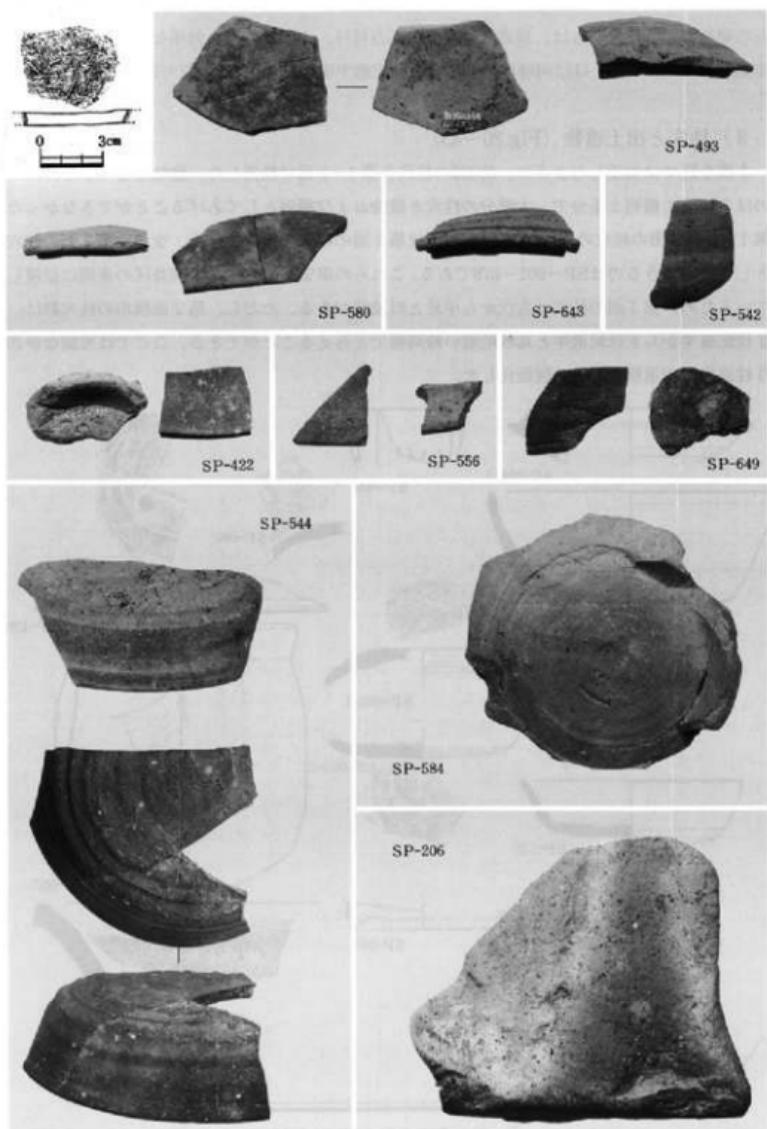


Fig.19 第104号掘立柱建物群出土遺物

らの建物群の各柱穴からは、須恵器の壺蓋・高台付环、土師器の高台付环などが出土している。本建物群はSB-102とはほぼ同時期のもので8世紀前半頃のものか(Fig17~19)。

3) 柱穴と出土遺物 (Fig.20~45)

本調査区では前述したように、約800の柱穴を第1・2面で検出した。建物としてまとめ得たのは7棟分と欄列2条分で、大部分の柱穴を建物および欄列としてあげることができなかった。第1・2面検出の柱穴のうちSP-219~492は第1面の柱穴と限定できる。なお、第2面の柱穴として限定できるのはSP-601~678である。これらの限定した柱穴群も調査区の東側に位置しているため、第1面の柱穴は古代から中世と時期幅がある。ただし、第2面検出の柱穴群は、7世紀後半から8世紀前半と比較的短い時間幅でとらえることができる。ここでは可能なかぎり柱穴出土の遺物を図化・図版化した。

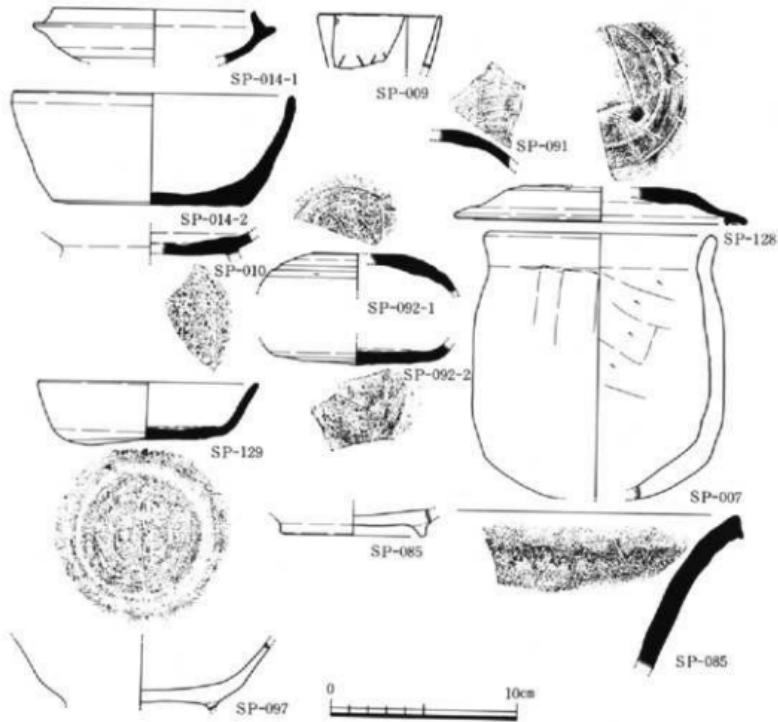


Fig.20 各柱穴出土遺物実測図(1)

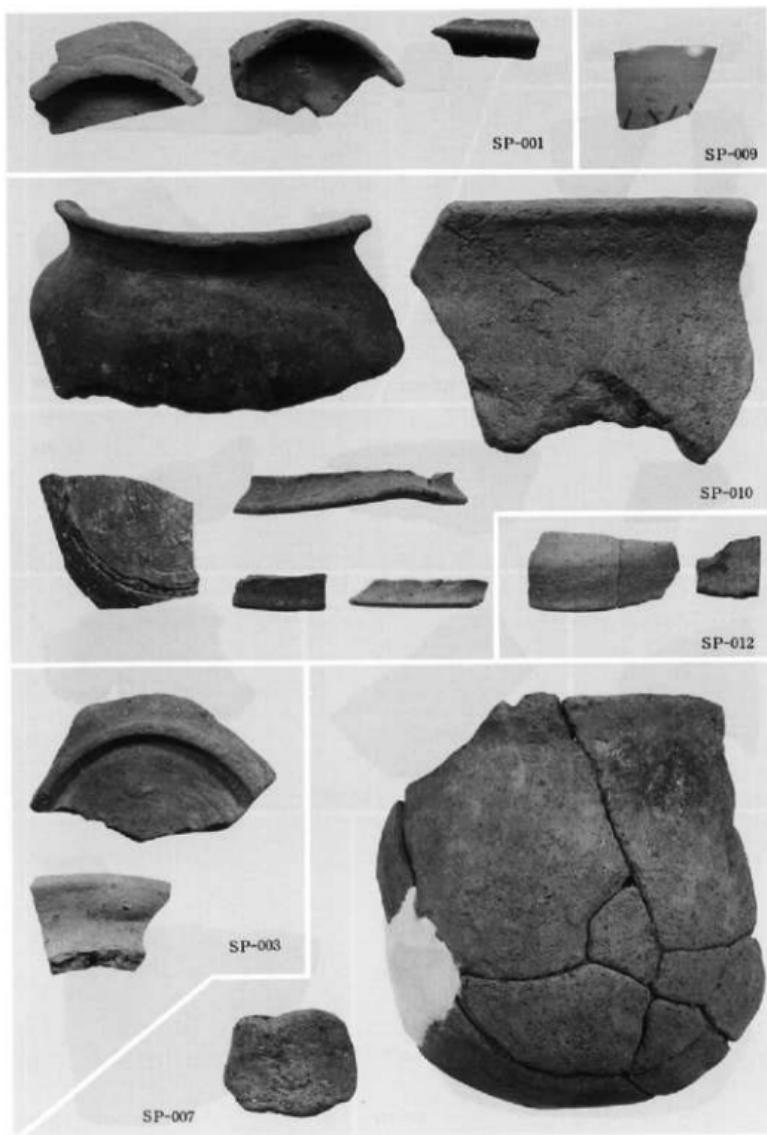


Fig.21 各柱穴出土遺物(1)

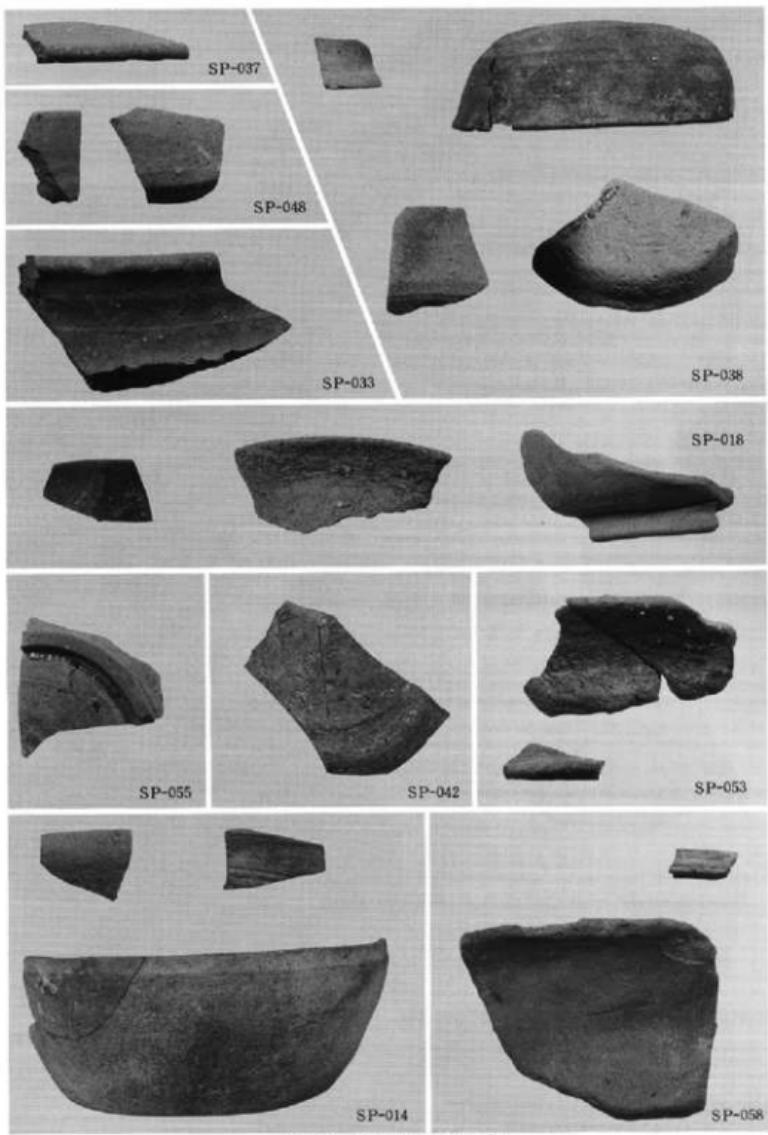


Fig.22 各柱穴出土遺物(2)

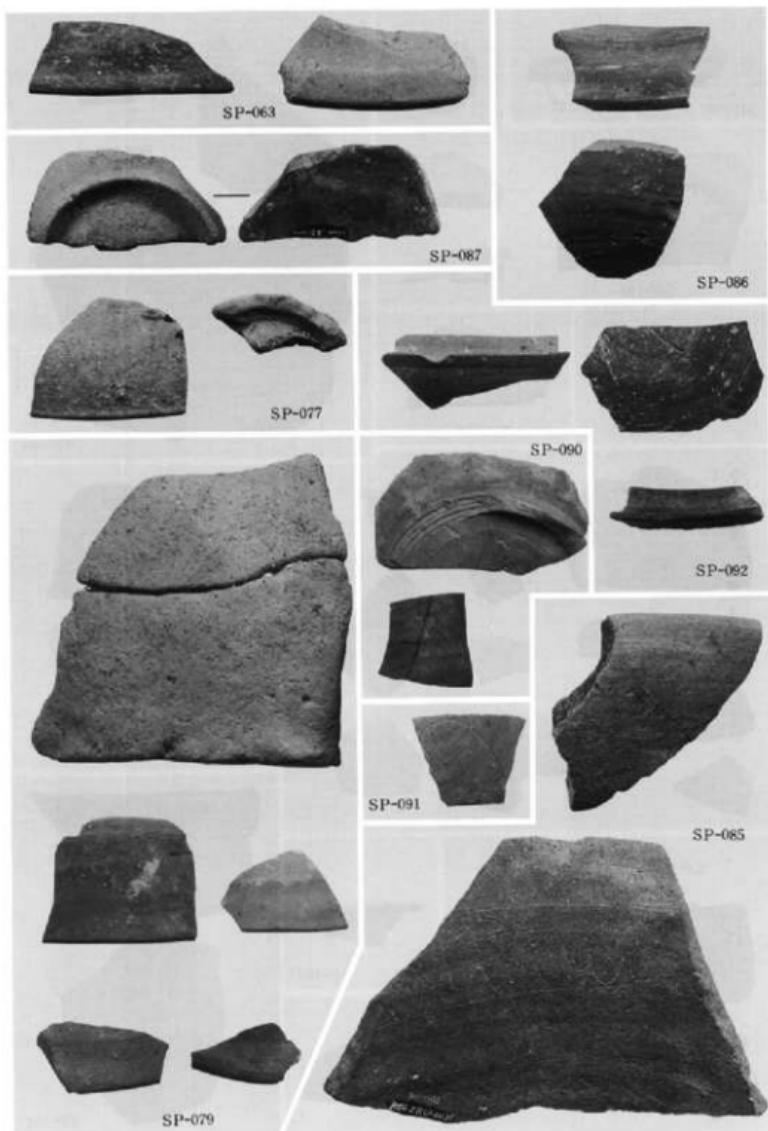


Fig.23 各柱穴出土遺物(3)

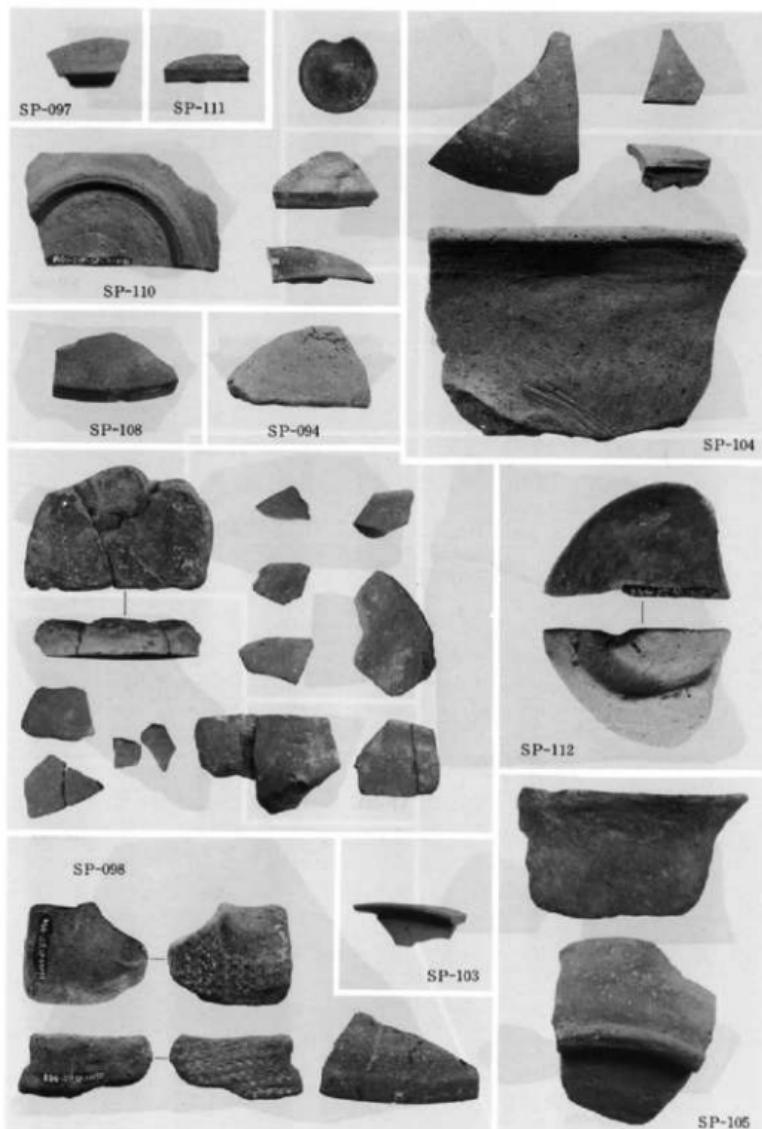


Fig.24 各柱穴出土遺物(4)

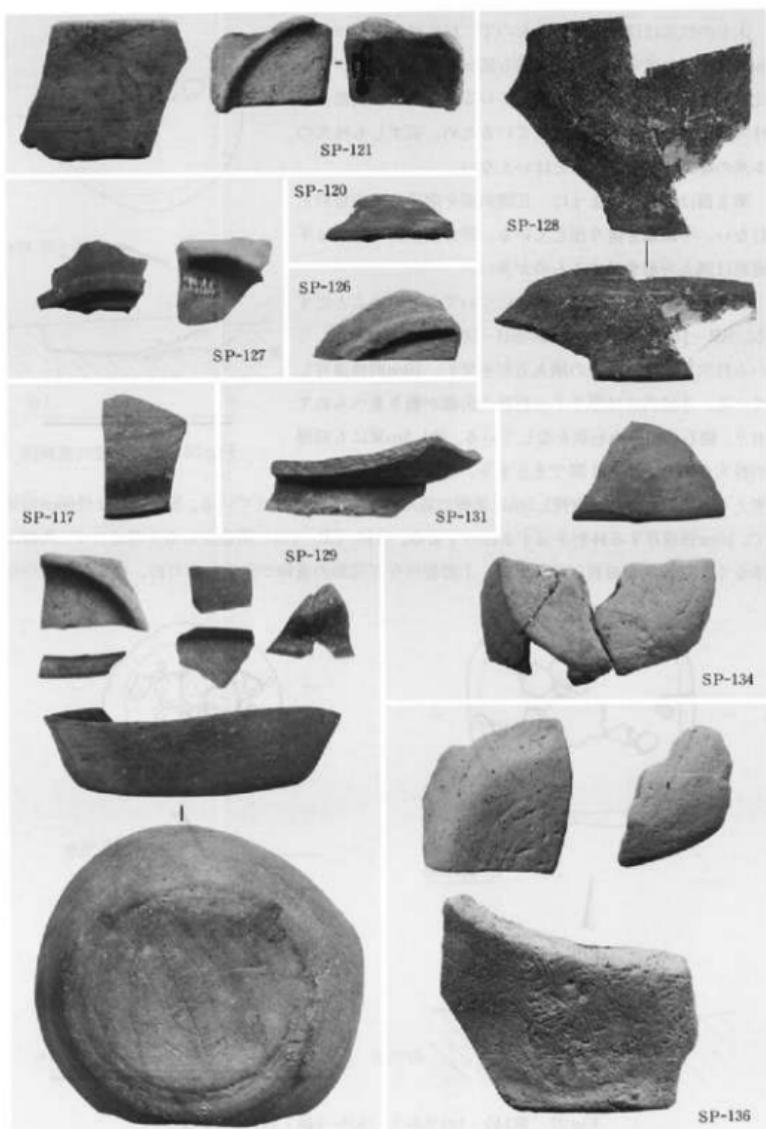


Fig.25 各柱穴出土遺物(5)

大半の柱穴は径60cm前後のもので、柱痕跡から径18~25cmの柱を用いている。遺存状態も50cmを超えるものが多く、比較的まとまった遺物が出土している。しかし、大部分の柱穴は整地層中に切り込まれているため、必ずしも柱穴の本来の時期を示しているとはいえない。

第2面は前述したように、丘陵斜面を削平し地山整形を行ない、平坦地を造り出している。第2面検出の柱穴は平面形は隅丸方形を呈するものが多い。

ここで特筆すべき造様・遺物についてみていくことにする。SP-140は調査区の北側のSB-102と同位置に位置している柱穴で、80cm前後の隅丸方形を呈し、10cm前後遺存している。本柱穴には厚さ7cm前後の角礫が敷き並べられており、礎石の根縛め石状をなしている。約1.5m東にも同様の柱穴があり、1×1間でまとまり、建物となる可能性が考えられる。しかし、南側1.5mは果樹の栽培によって破壊されている。SP-141は径60cm前後で、10cm強遺存する鉢形を呈する柱穴である。当初、SP-140と関連があると考えたが、角礫は少なく、越州窯青磁皿、黒色土器、土師器壺など光形の遺物が出土したため、柱穴祭祀が行な

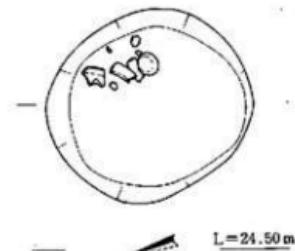


Fig.26 第10号柱穴実測図

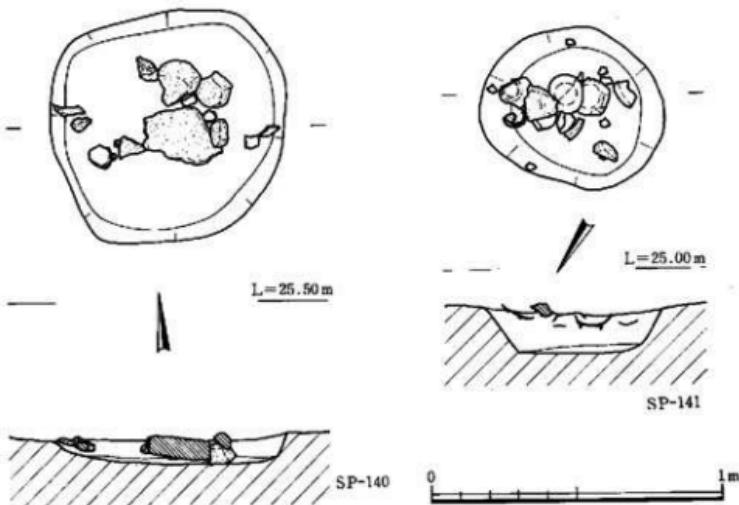


Fig.27 第140・141号柱穴 (SP-140・141) 実測図

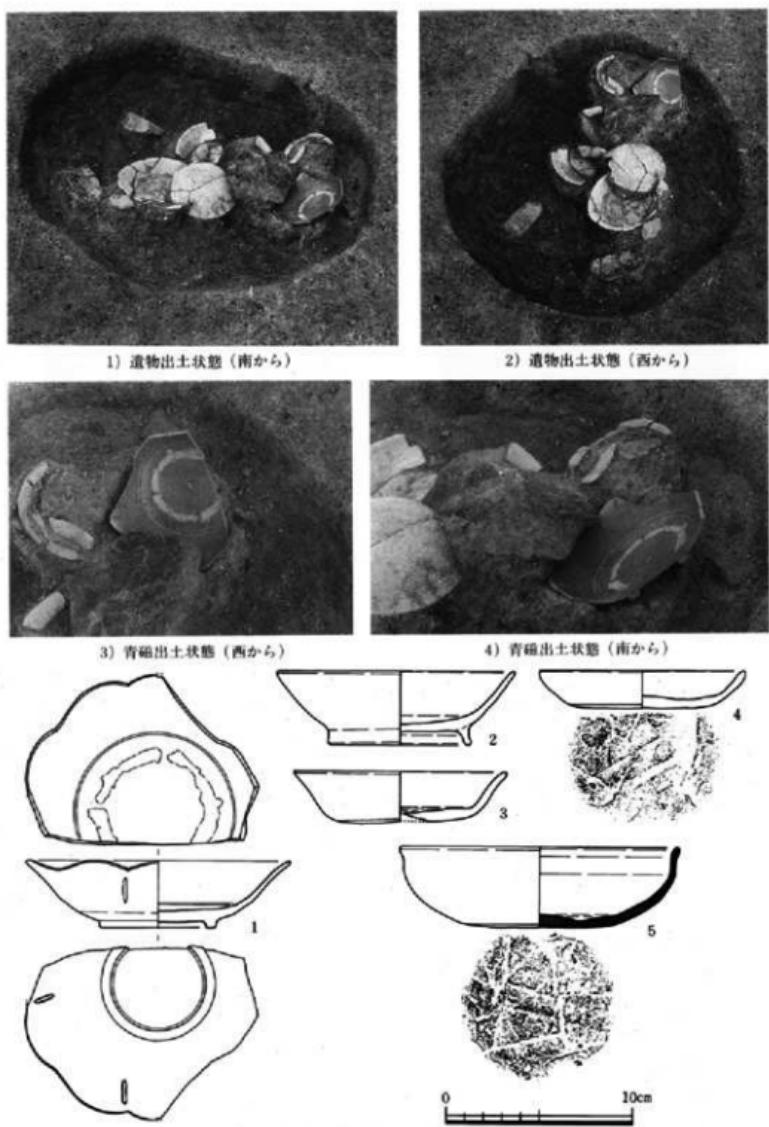


Fig.28 第101号柱穴遺物出土状態および出土遺物実測図

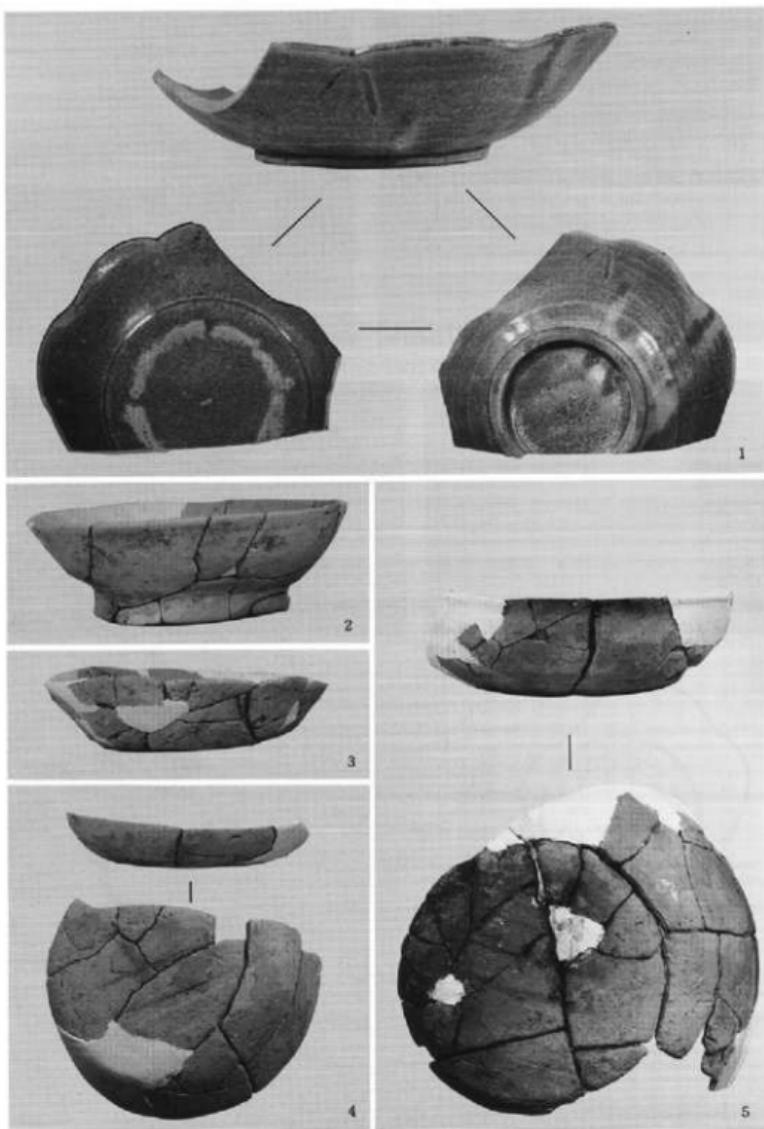


Fig.29 第141号柱穴出土遺物(1)



Fig.30 第141号柱穴出土遺物(2)

われたととらえた（巻頭図版、Fig.27～30）。

出土遺物のなかで、もっとも新しい時期のものはSP-009から出土した染付のある磁器である。各柱穴から出土した須恵器壺蓋や壺身の天井部や外底、甕の口縁部、甕の頸部にヘラ記号が記されたものが目立つ。SP-344・588では越州窯青磁が出土している。SP-190では器高3cm、幅2.3cm、厚さ2cmの權が出土している（P.67参照）。

4) 第1面検出時出土遺物 (Fig.40～58)

遺構検出時に多種多様の多量の遺物が出土した。特に調査区の南側は整地層で、第1面での遺構が不明瞭であり20cm前後掘削し遺構検出を行なったため、各時期の遺物が出土した。ここでは、検出時に出土した遺物が本調査区の第1・2面の掘立柱建物および柱穴群の時期を反映していると考えられるので、個々の遺物についてみていくことにする。

まず、もっとも多い須恵器からみていくことにする。出土須恵器には壺蓋・壺身・高壺・皿・鉢・甕・匙・提瓶・横瓶・甕などがある。

1～16は蓋類である。3・4・13の天井にはヘラ記号が記されている。1～7・10～12・15・16は有返しの蓋類で、3・11・12は天井部中央につまみをもっている。14のみが無返しで、口

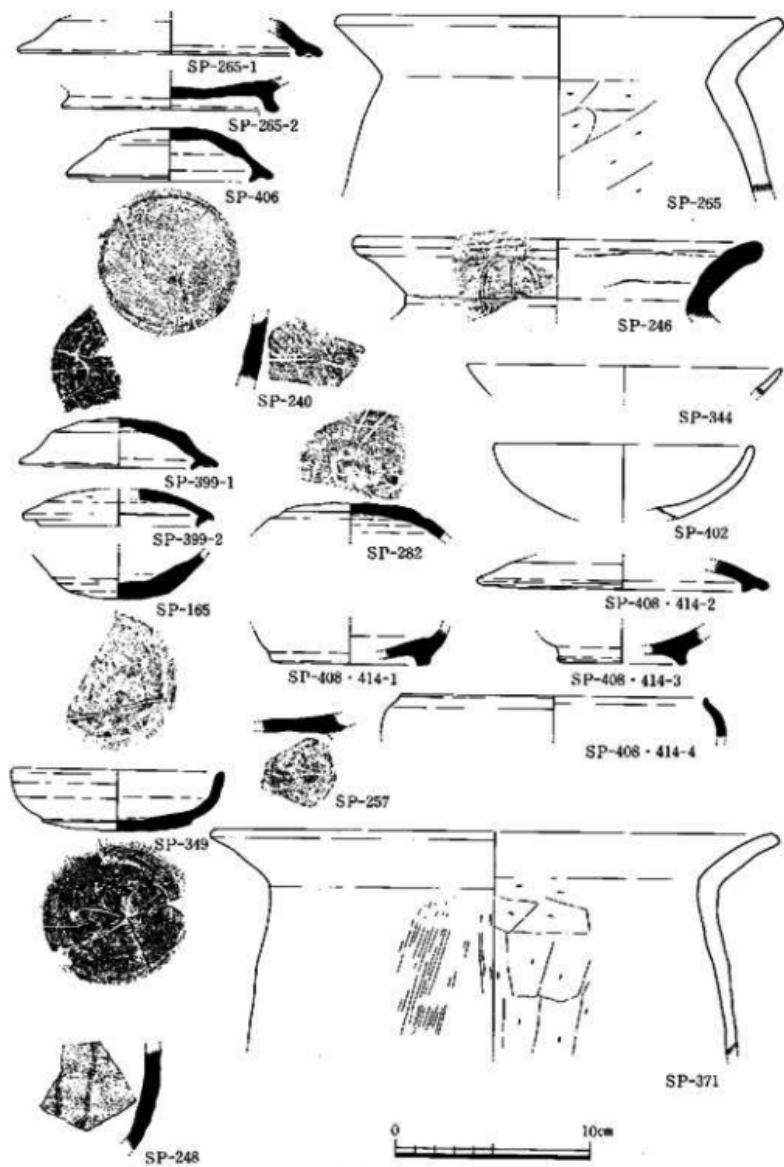


Fig.31 各柱穴出土遺物実測図(2)

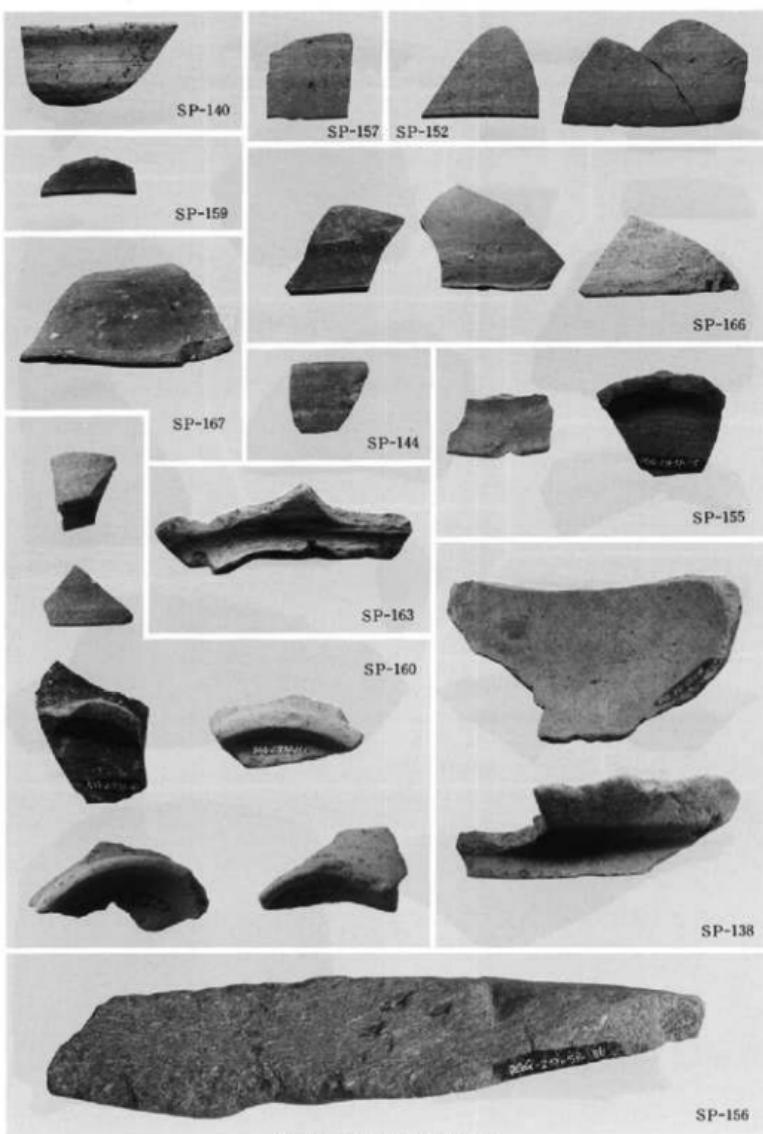


Fig.32 各柱穴出土遺物(6)

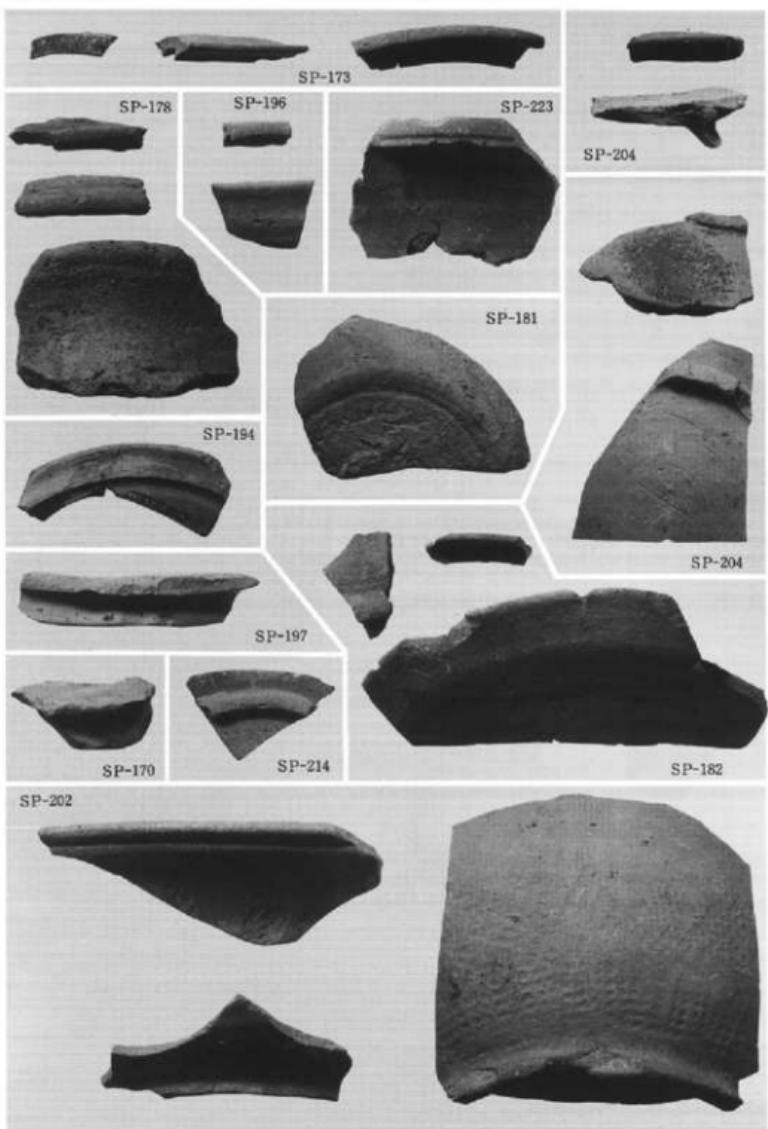


Fig.33 各柱穴出土遺物(7)

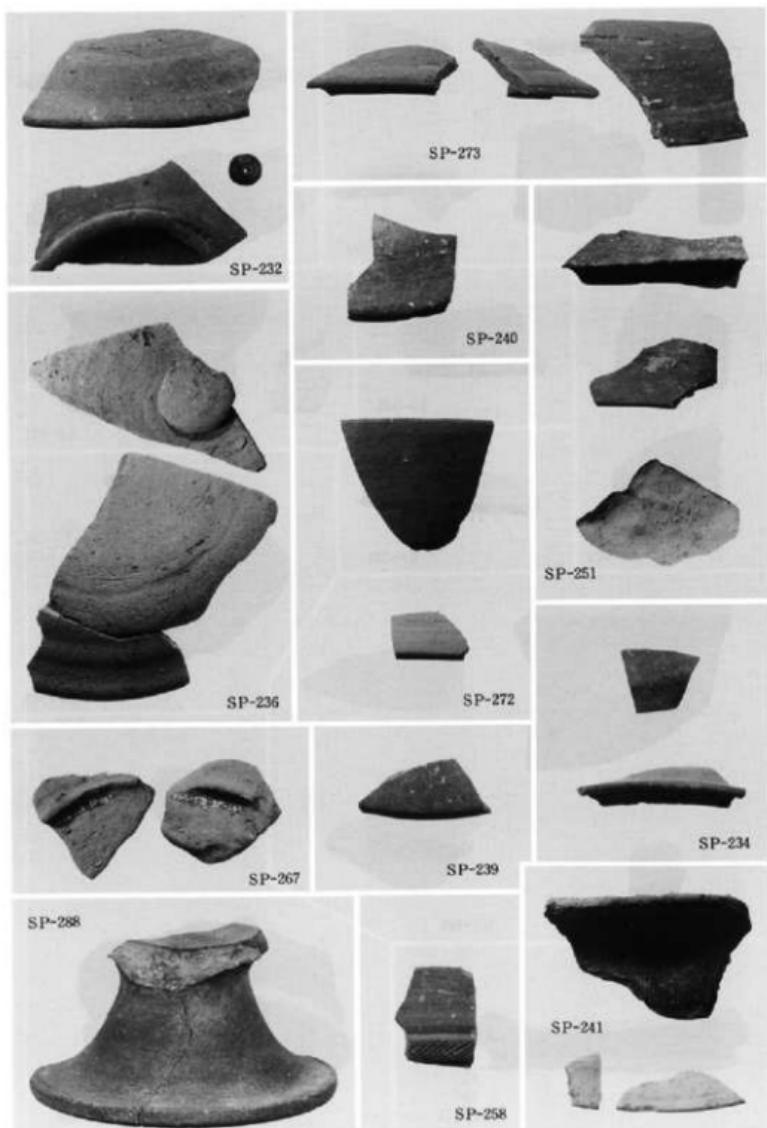


Fig.34 各柱穴出土遺物(8)

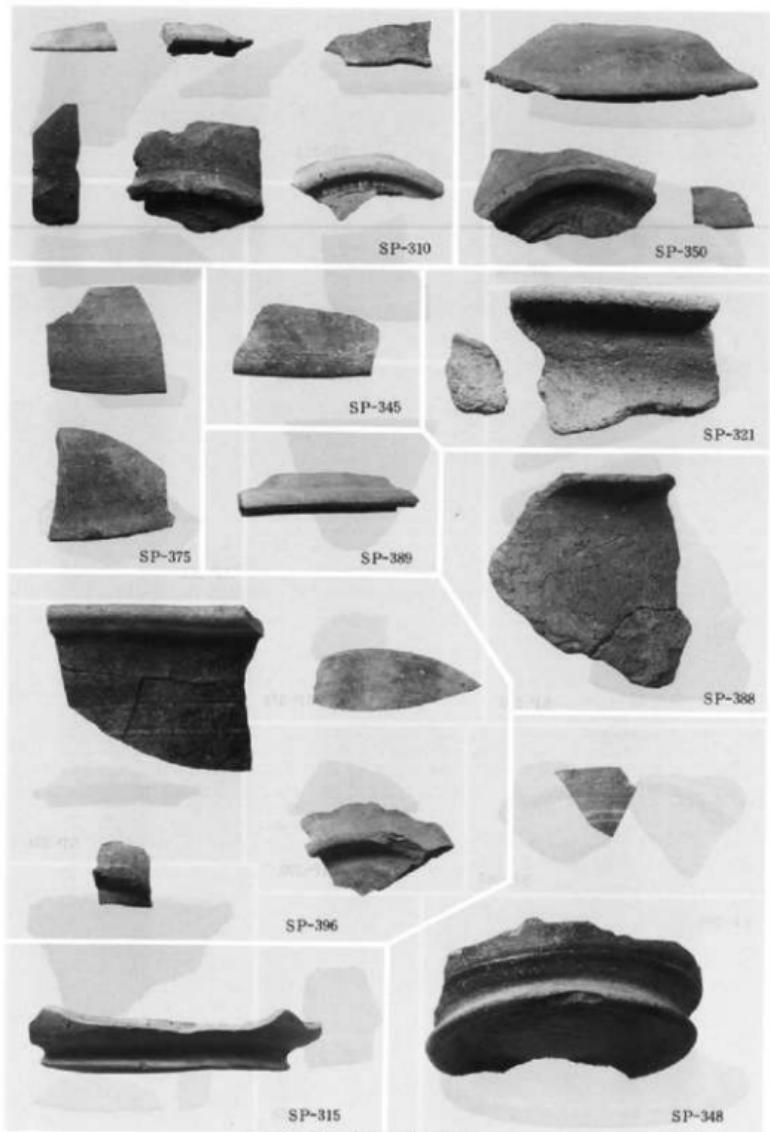


Fig.35 各柱穴出土遺物(9)

縁端部は丸く仕上げている。8・9・13は古墳時代後期の坏蓋で、口径は8が10.8cm、9が12.2cm、器高は8が2.5cm、9が3.5cm強である。15は受け部径23.2cmと大きく、鉢などの蓋か。1~7・10~12・14・16は坏蓋で、受け部径は5がもっとも小さく8.4cmで、2の16.2cmがもっと大きい。坏蓋は口径が11cm前後のもの、13cm前後のもの、15cmを超えるものがほぼ同比率で出土している。3の受け部径は13.4cm、器高2.6cm。

17~48は坏および塊である。17~28は受け部をもつ坏である。24・28の外底にはヘラ記号が記されている。受け部の形態から、これらの坏は古墳時代後期のもので6世紀後半から7世紀にかけてのものであるといえよう。受け部径は11.5cm前後のもの、13cm前後のもの、14.6cm前

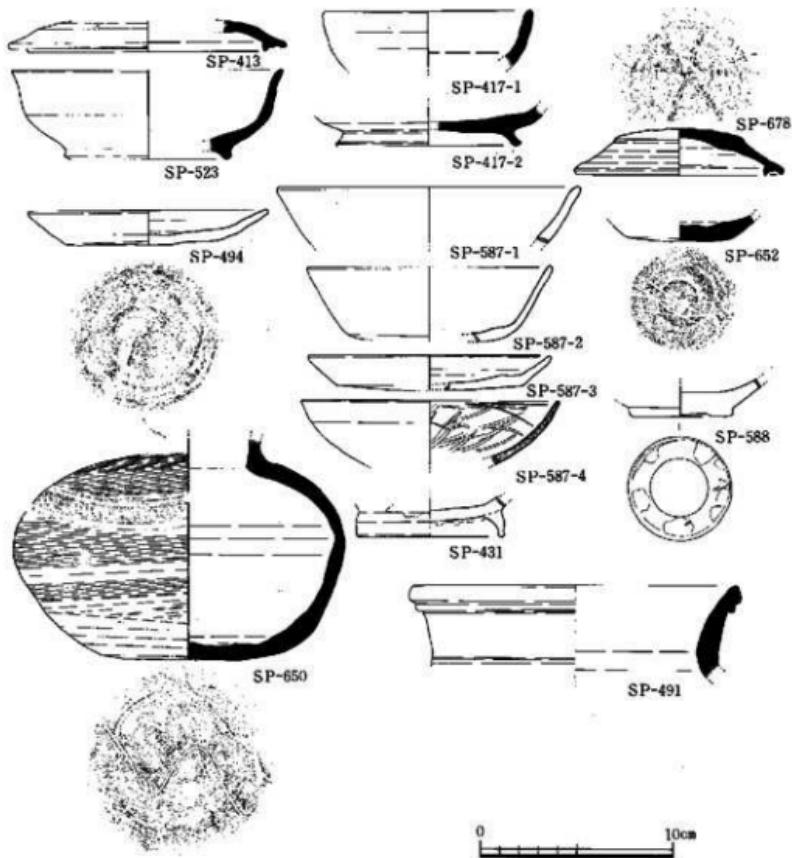


Fig.36 各柱穴出土遺物実測図(3)

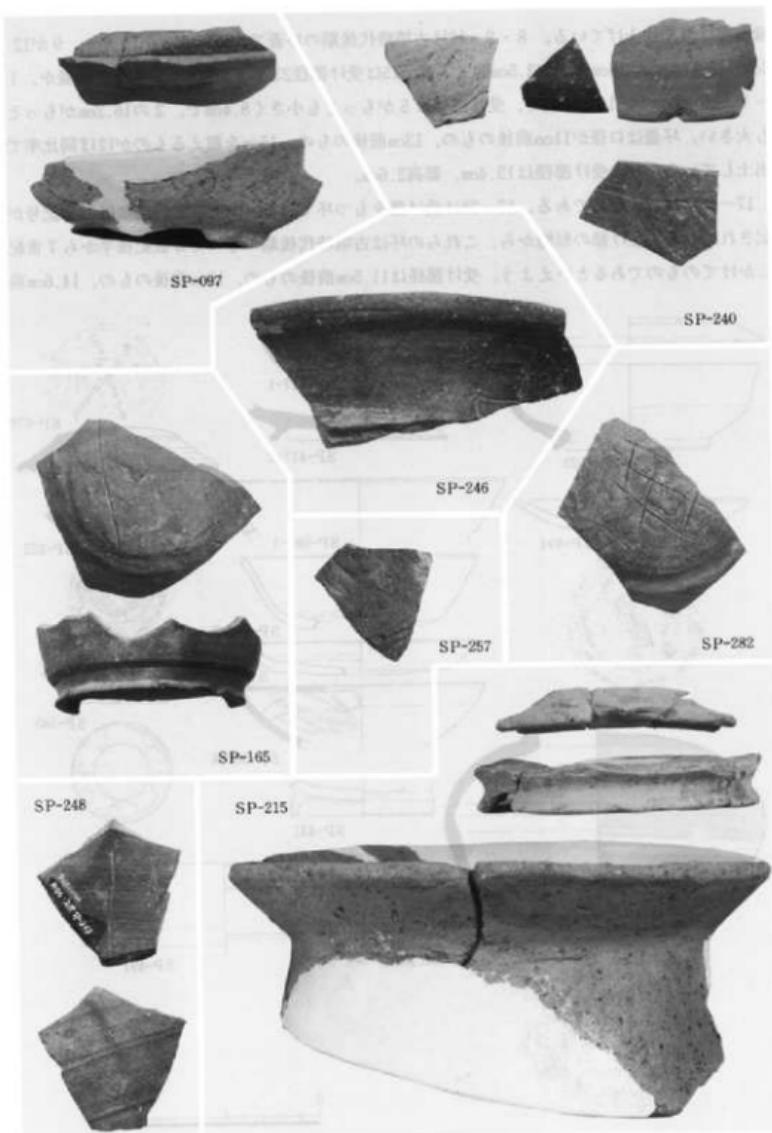


Fig.37 各柱穴出土遺物

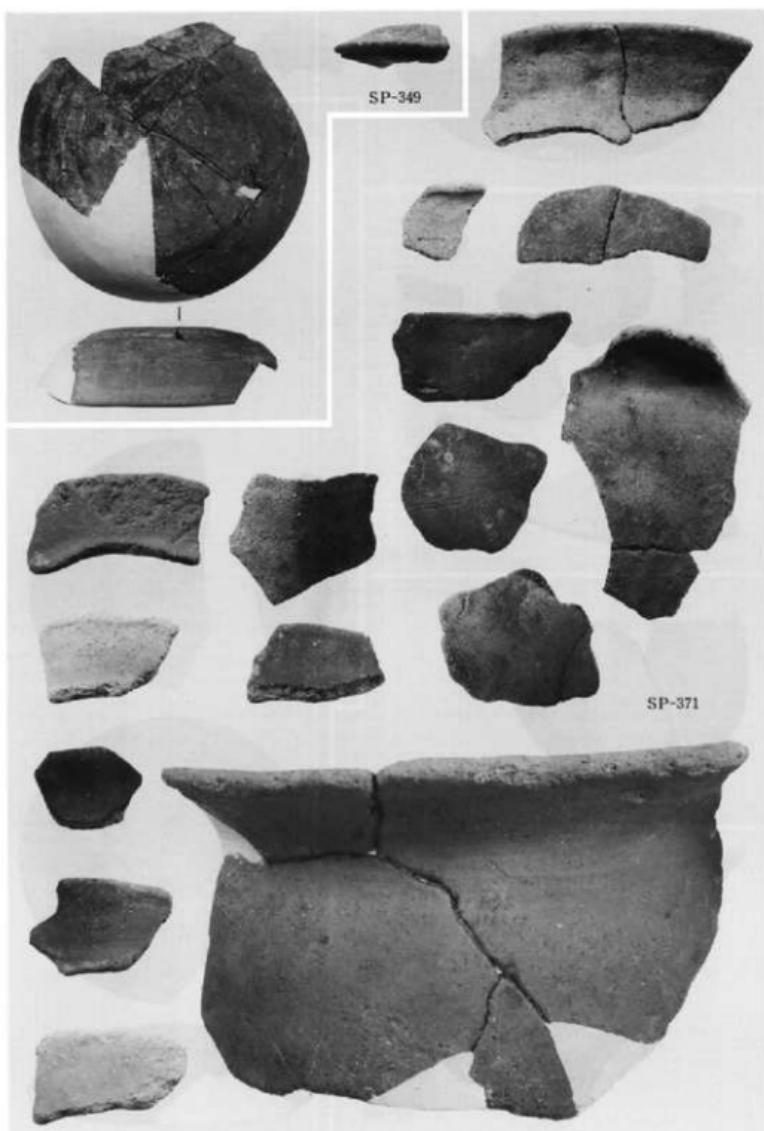


Fig.38 各柱穴出土遺物⑩



Fig.39 各柱穴出土遺物

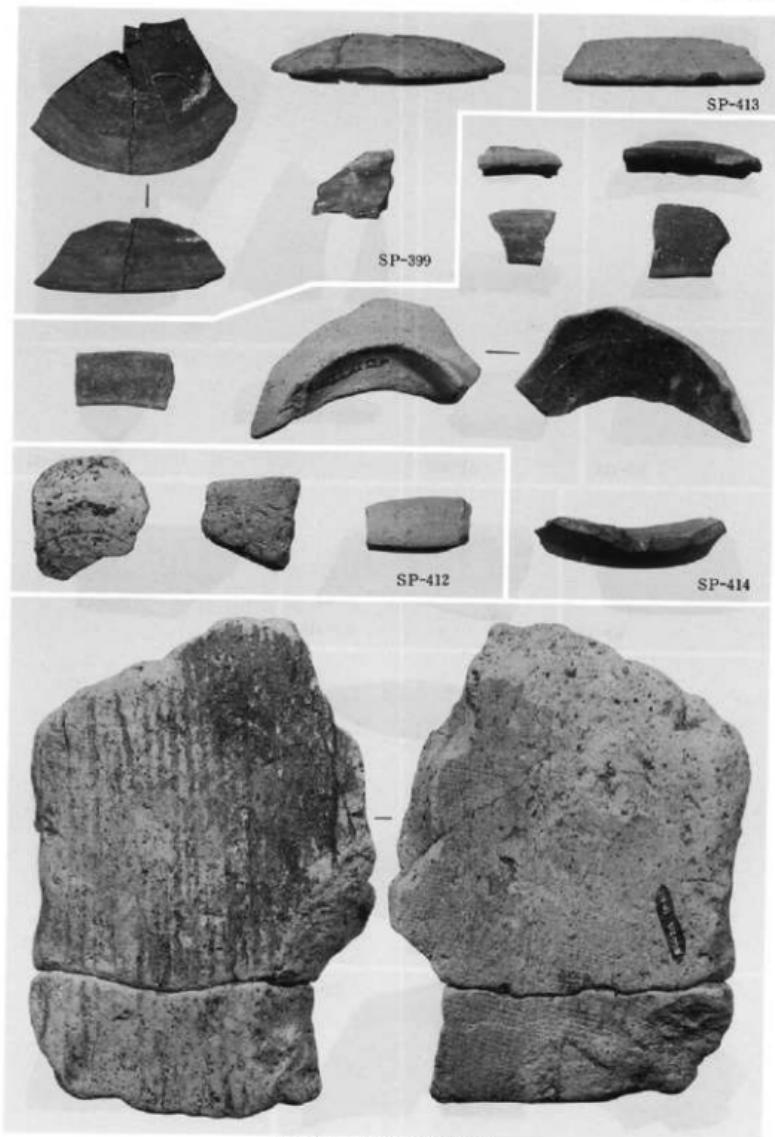


Fig.40 各柱穴出土遺物⑬

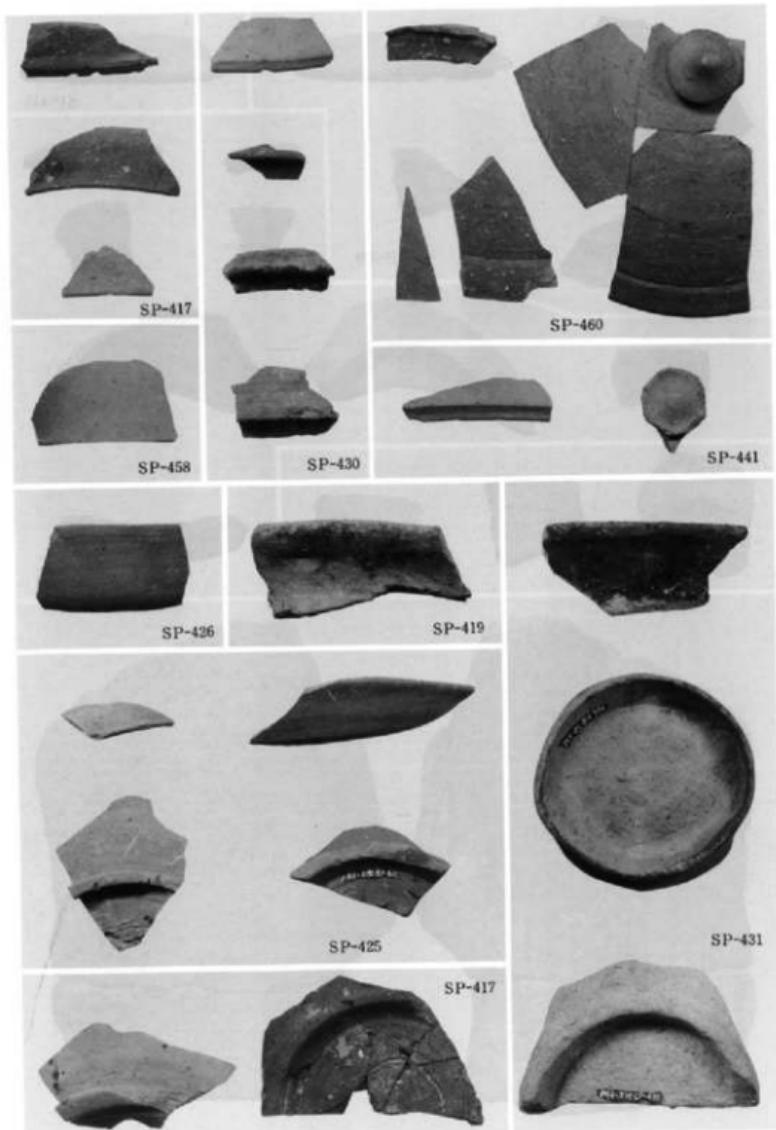


Fig.41 各柱穴出土遺物10

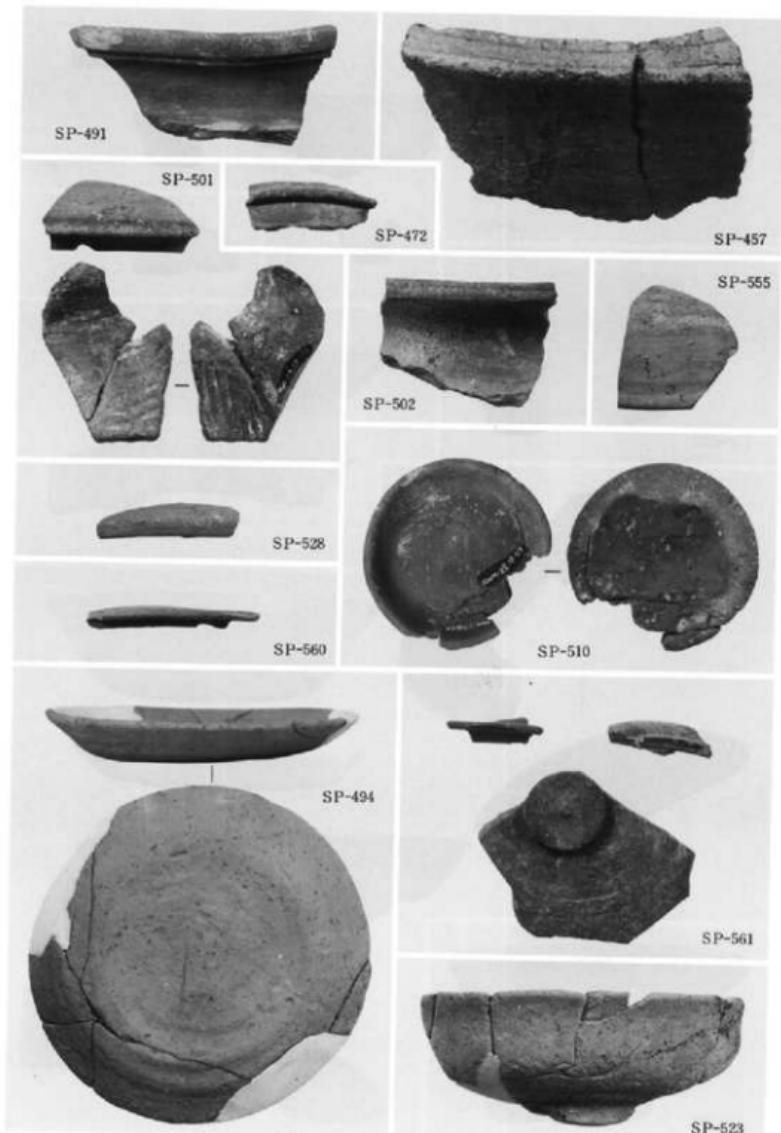


Fig.42 各柱穴出土遺物[9]

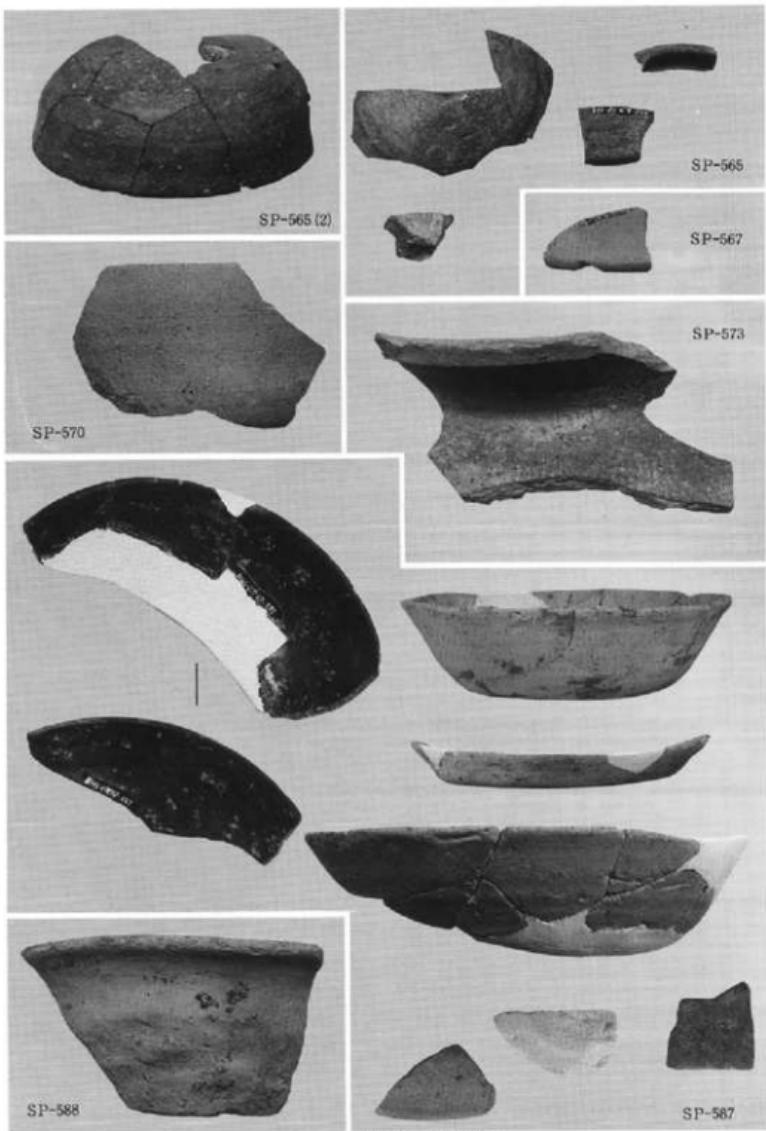


Fig.43 各柱穴出土遺物

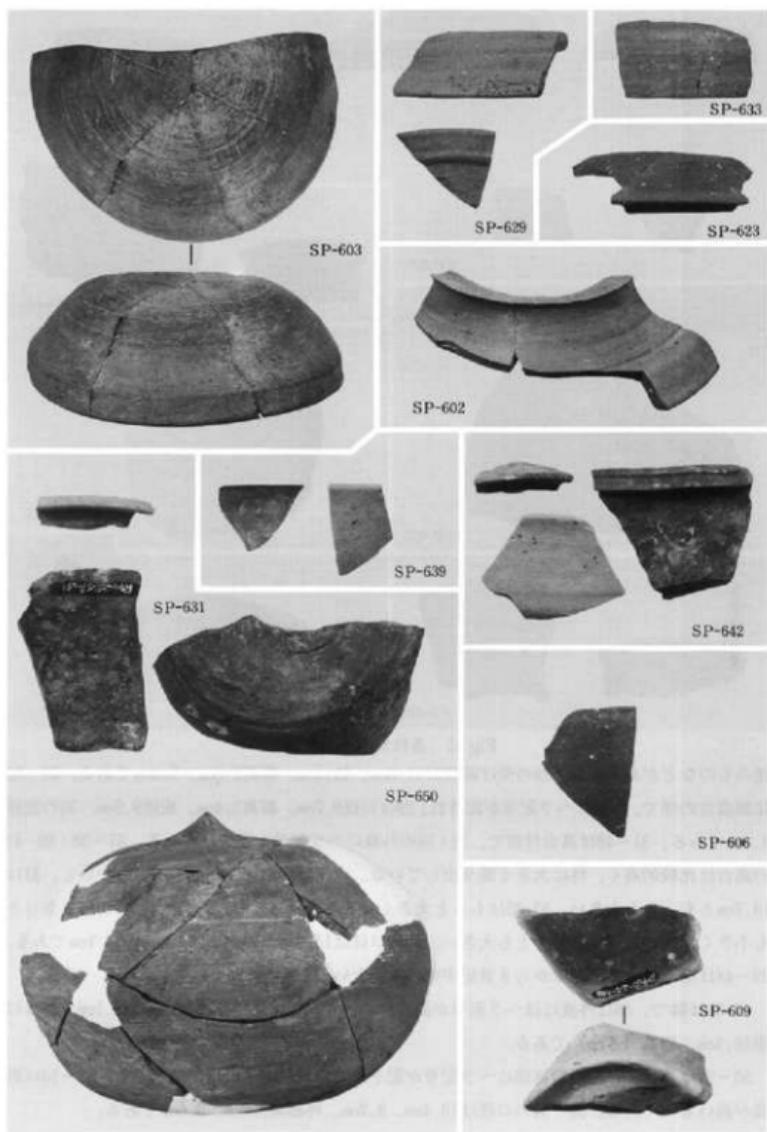


Fig.44 各柱穴出土遺物図

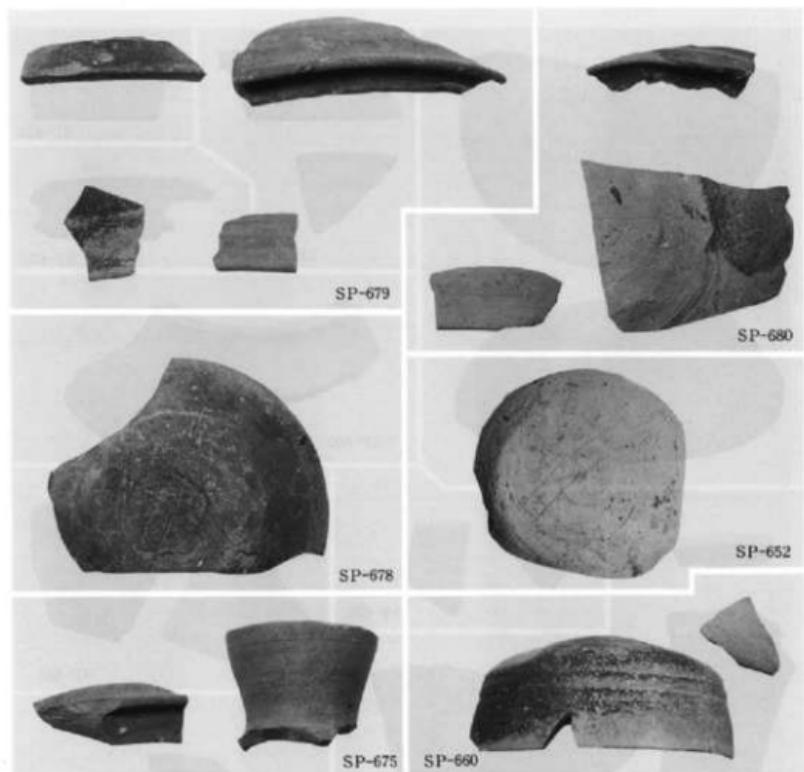


Fig.45 各柱穴出土遺物図

後のものなどがある。24・28の受け部径は11.6cm、11.4cm、器高2.8cm、2.9cmである。29・30は無高台の環で、外底にヘラ記号が記され、29は口径9.7cm、器高3.4cm、底径9.2cm、30の底径8.8cmである。31～48は高台付碗で、33・34の外底にヘラ記号が記されている。31～38・40・41の高台は比較的高く、外に大きく張り出している。口径は48が10.8cmともっとも小さく、31は14.7cmともっとも大きい。32・35はもっと大きくなると考えられる。底径は41が7.8cmとっとも小さく、32が12.7cmとっとも大きい。43の口径は13.8cm、器高5.2cm、底径10.1cmである。29～48は形態から7世紀末から8世紀中頃のものといえよう。

49・56は鉢で、56は外底にはヘラ記号が記されている。49は口径12.3cm、器高5.1cm、56は口径16.3cm、器高(8cm)である。

50～54は高環で、54の脚裾部にヘラ記号が記されている。50・51は脚部が低く、52～54は脚部が高いものである。50・51の口径は10.4cm、9.2cm、環部高3.9cm、3.6cmである。

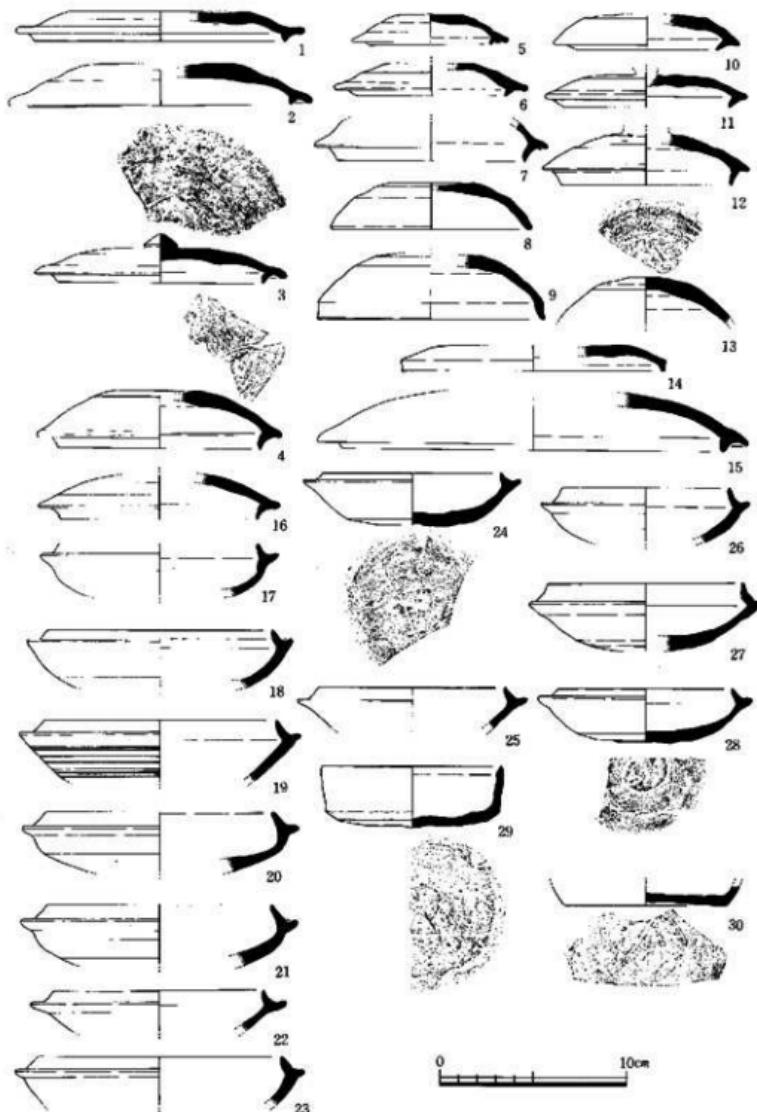


Fig.46 第1面検出時出土遺物実測図(1)

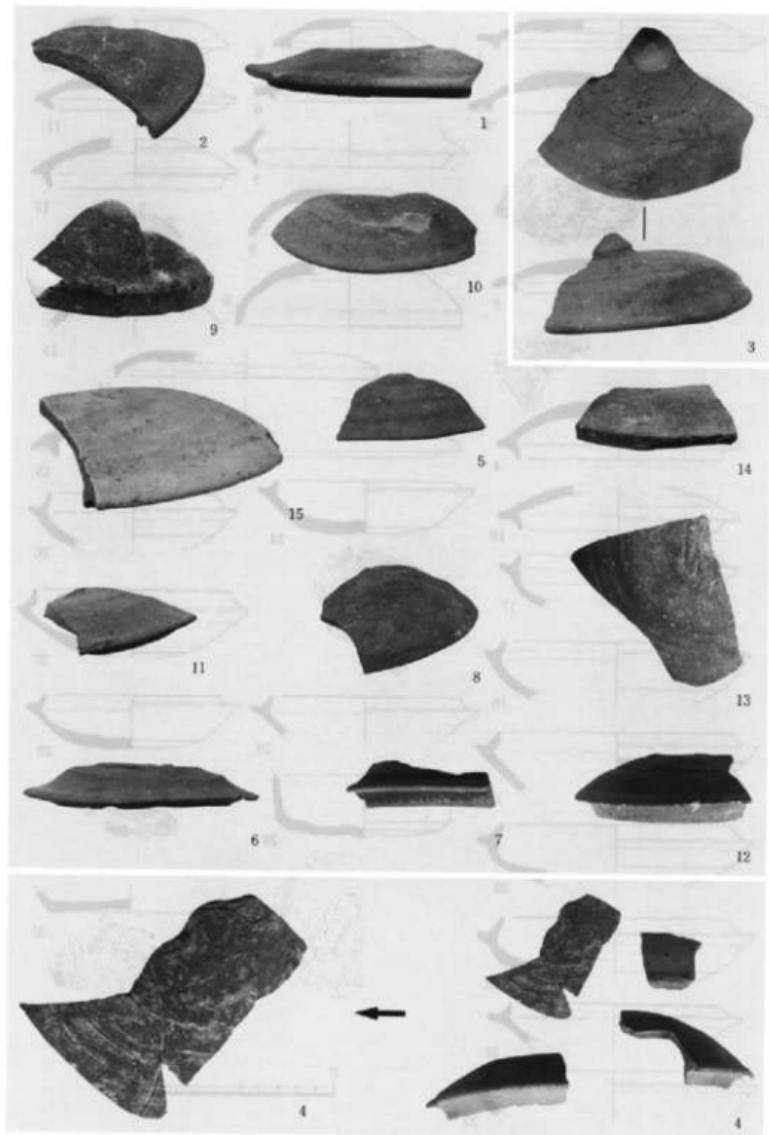


Fig.47 第1面檢出時出土須惠器環蓋

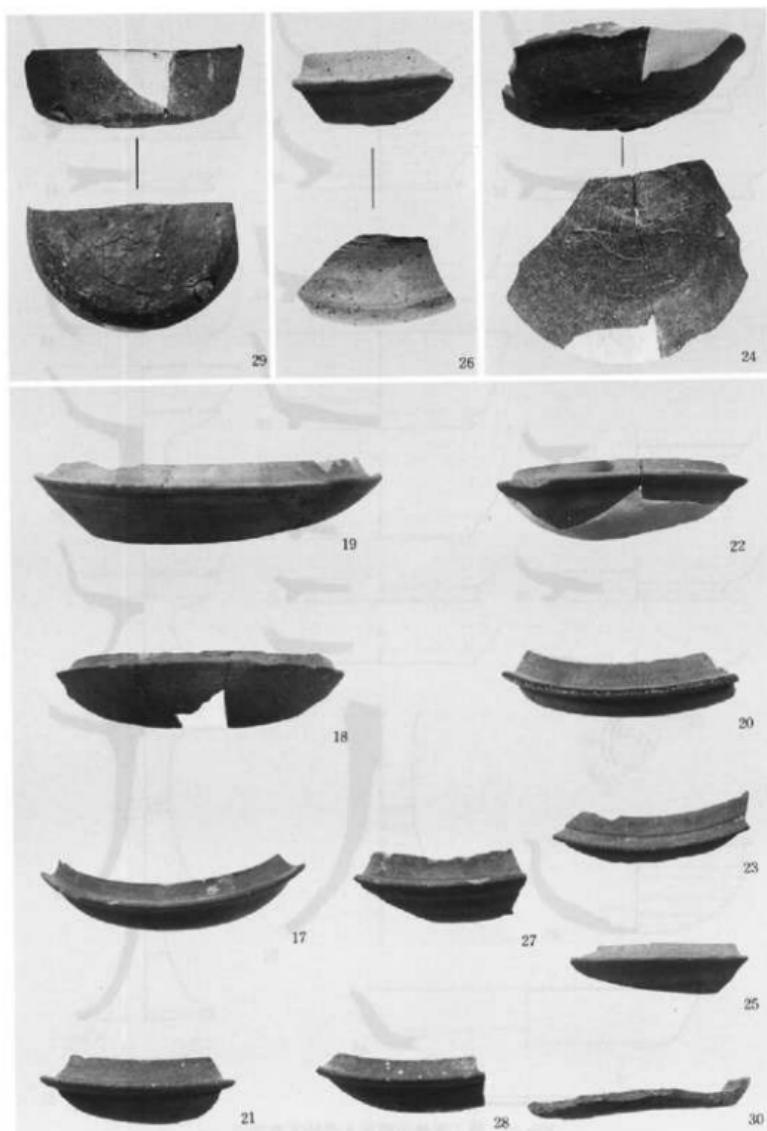


Fig.48 第1面検出時出土須恵器環身(1)

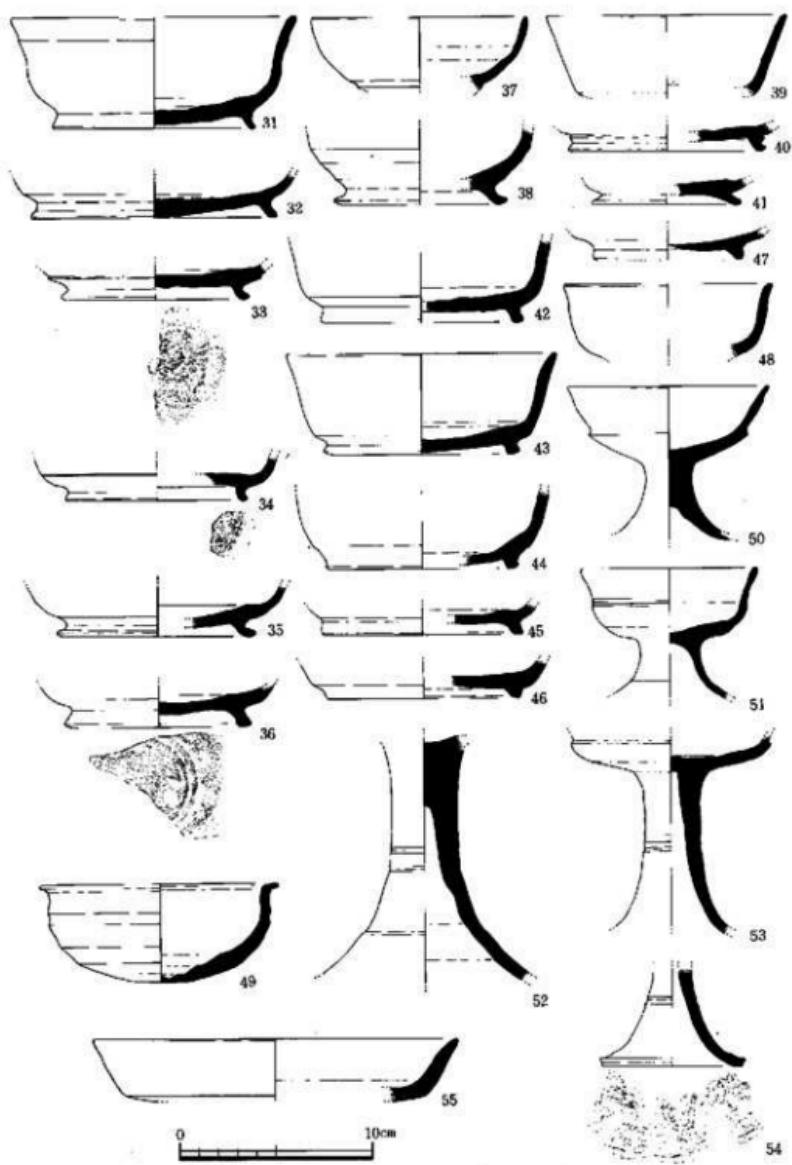


Fig.49 第1回検出時出土遺物実測図(2)

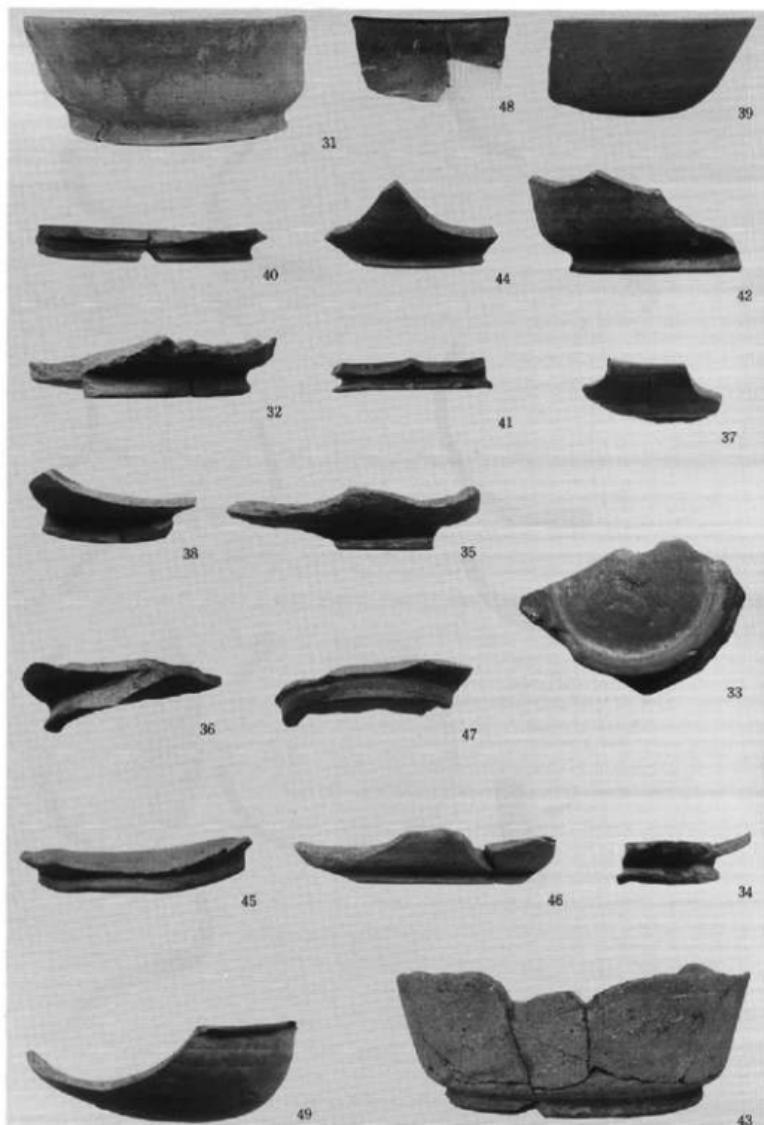


Fig.50 第1面検出時出土須恵器坏身(2)

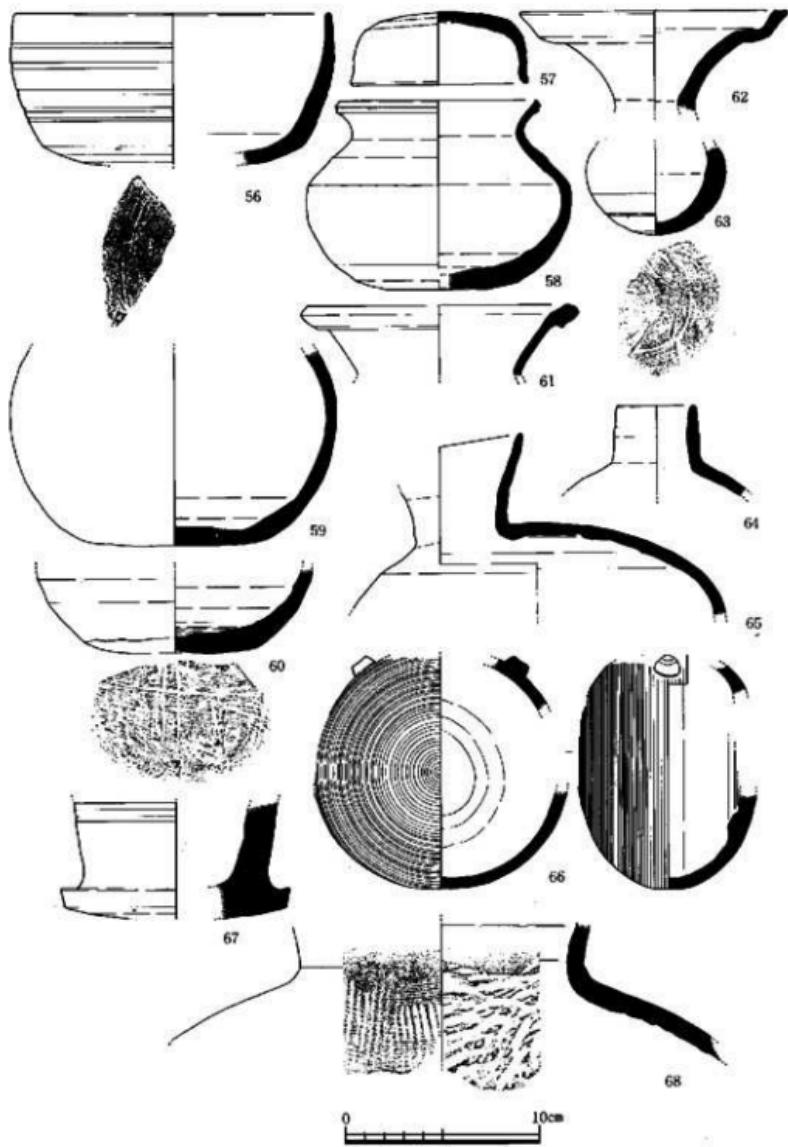


Fig.51 第1面検出時出土遺物実測図(3)

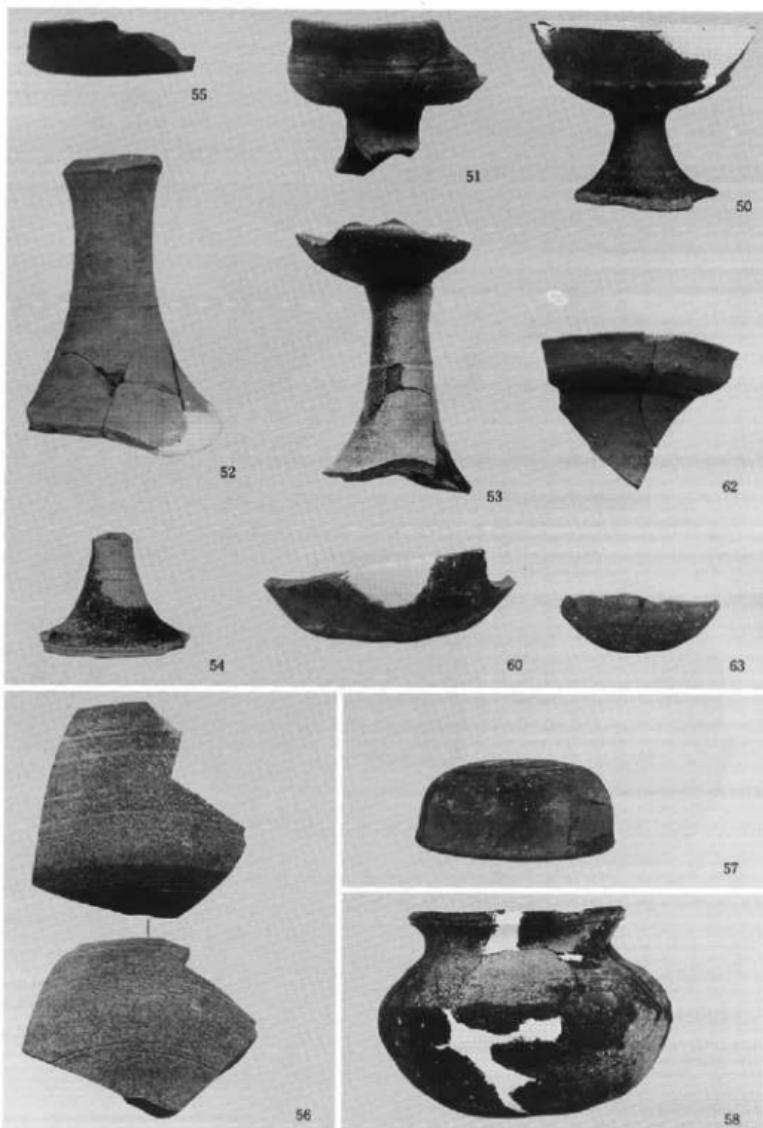


Fig.52 第1面検出時出土須恵器その他(1)

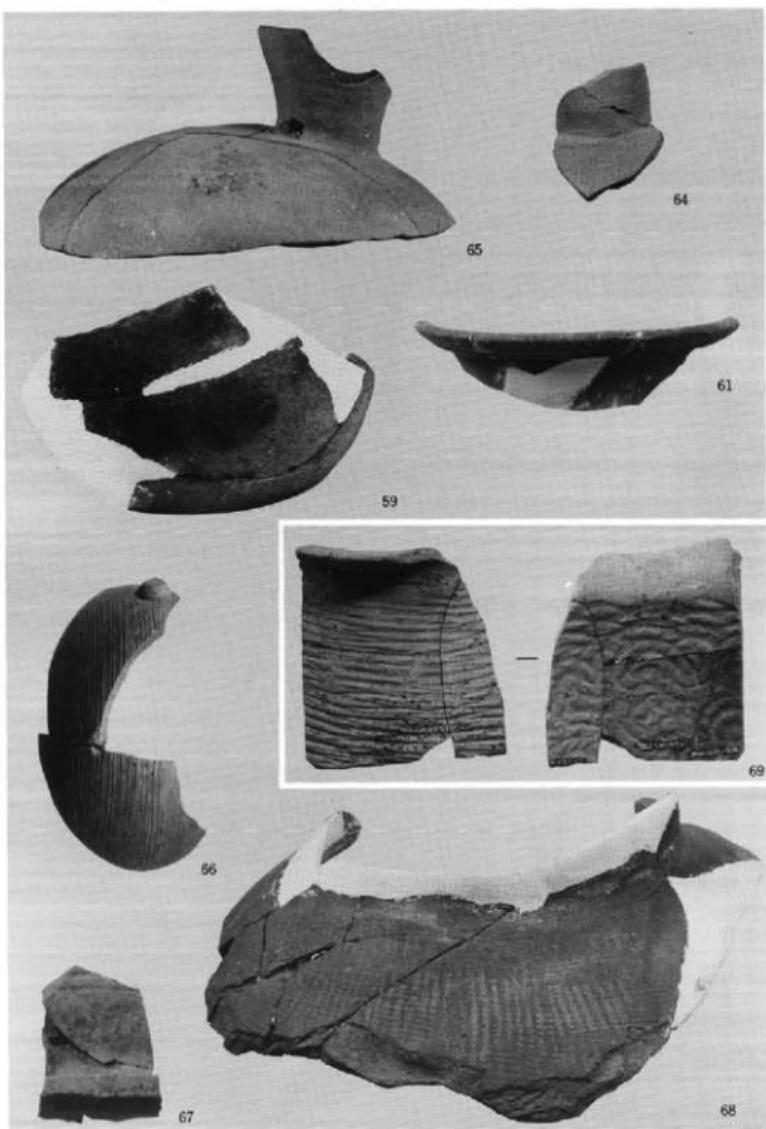


Fig.53 第1面検出時出土須恵器その他(2)

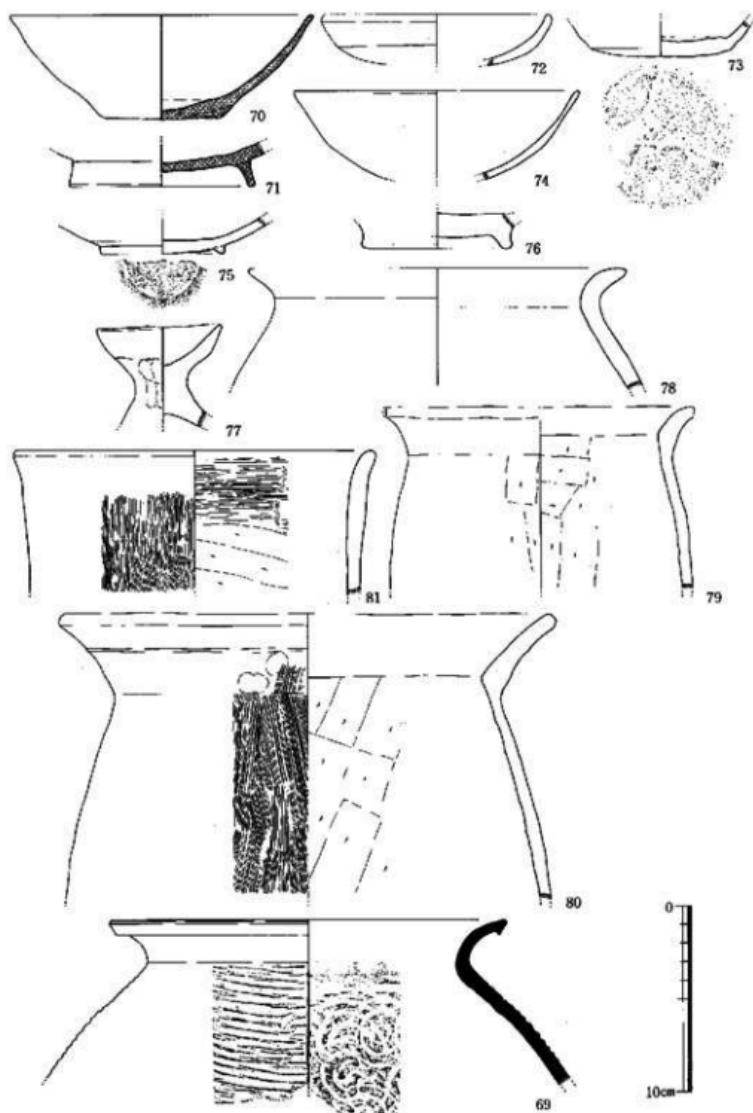


Fig.54 第1面検出時出土遺物実測図(4)

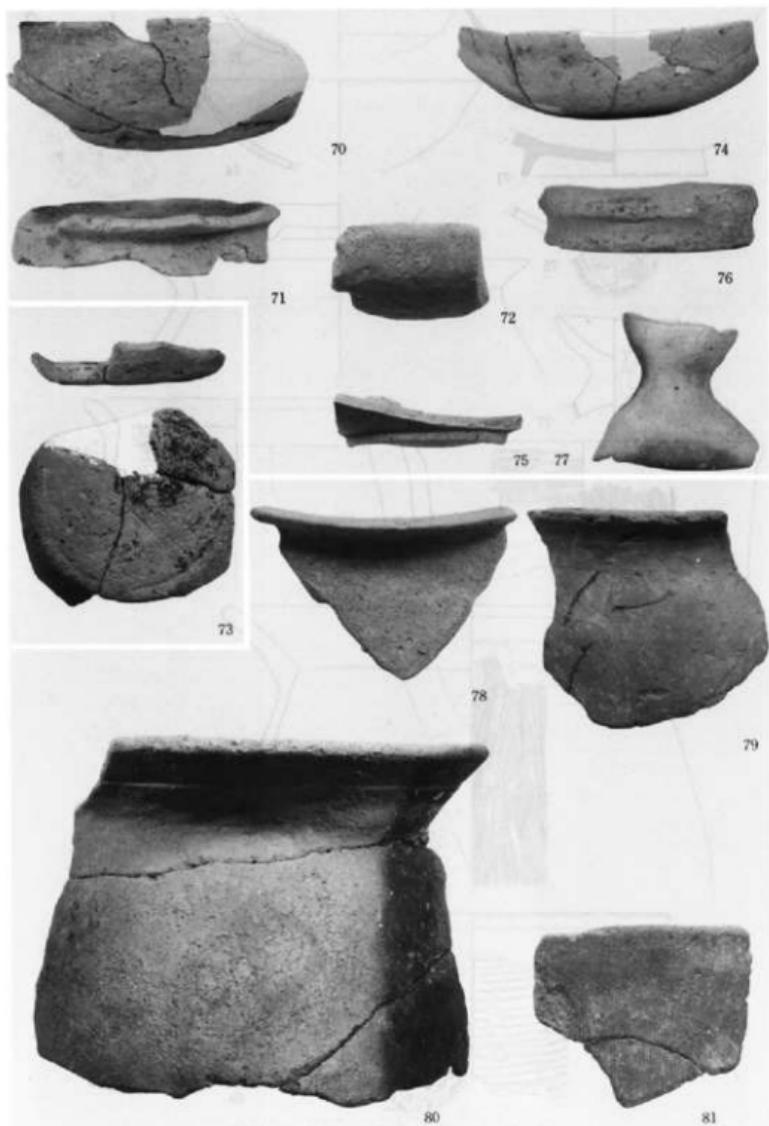


Fig.55 第1面検出時出土土器(1)

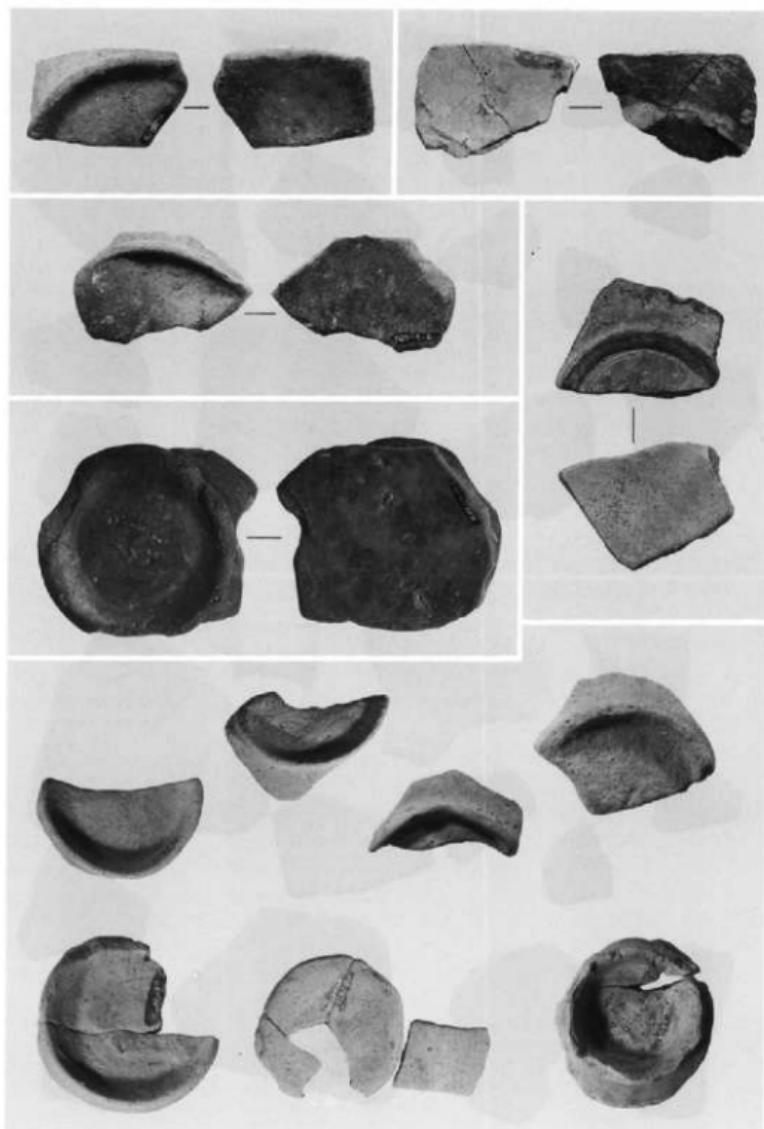


Fig.56 第1面検出時出土土器(2)

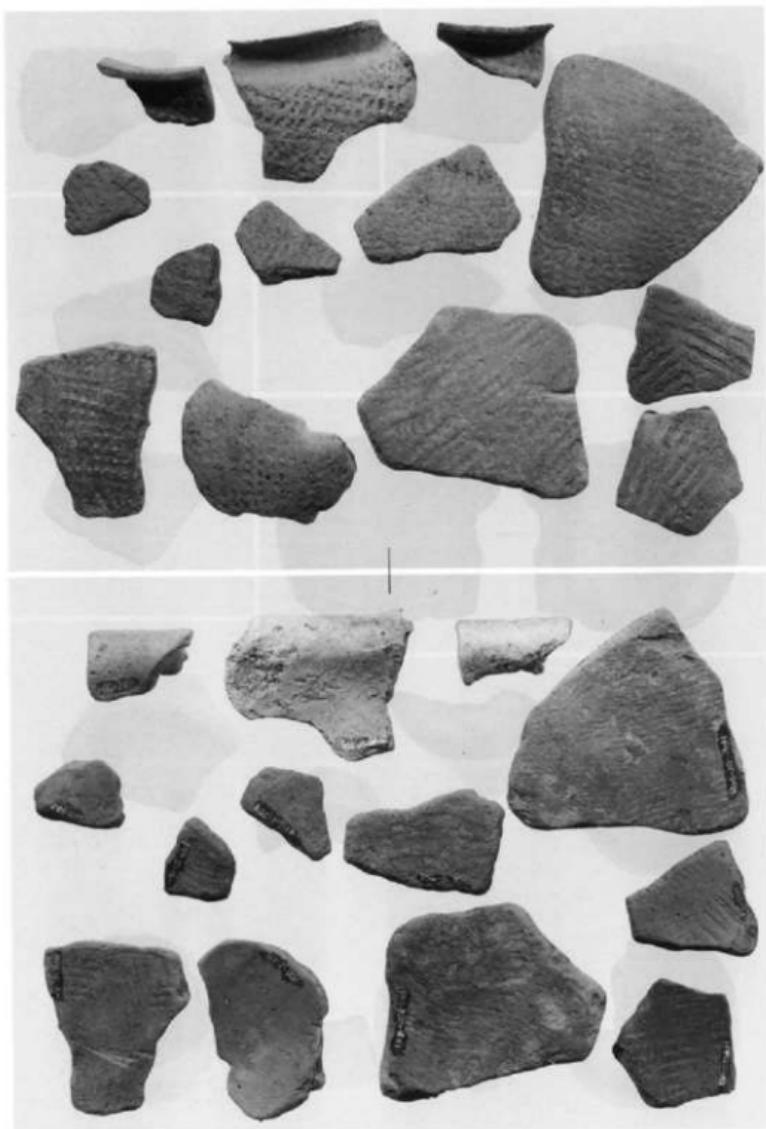


Fig.57 第1面検出時出土土器(3)

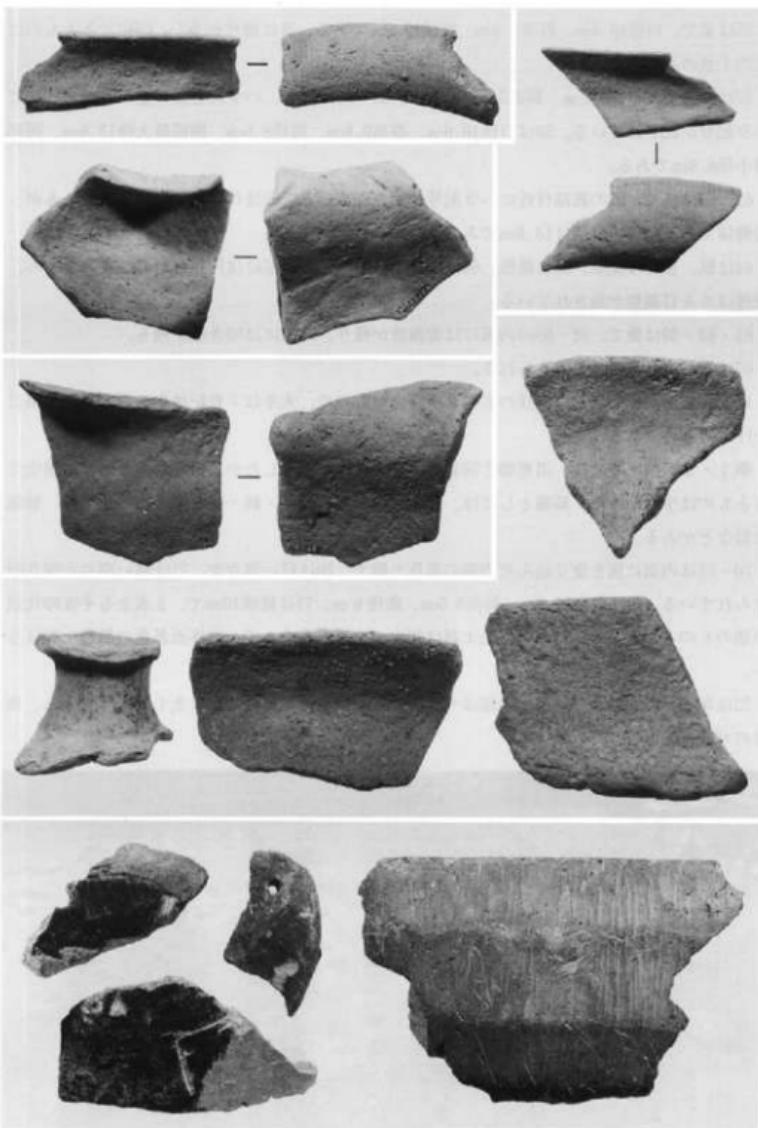


Fig.58 第1面検出時出土土器および石器(4)

55は皿で、口径18.8cm、器高3.3cm、底径15.6cmである。皿は細片が多く、図化できるものはこの1点のみである。

57は壺蓋で、口径9.2cm、器高3.8cmである。58～60は壺で、いずれも短頸壺か。60の外底にヘラ記号が記されている。58は口径10.6cm、器高9.8cm、底径8.5cm、胴部最大径13.6cm、頸部最小径8.8cmである。

62・63は甕で、63の底部付近にヘラ記号が記されている。62は口縁部、63は下部であるが、別個体である。62の口径は13.8cmである。

64は瓶、または提瓶、65は横瓶、66は提瓶である。66の肩部には円錐台形のつまみをもち、胴部はカキ目調整が施されている。

61・68・69は甕で、68・69の内面には青海波が残り、外面には叩き痕が残る。

67は筒形容器の底部と考えられる。

以上の須恵器は6世紀末前後のものを少量含むものの、大半は7世紀後半から8世紀中頃にかけてのものである。

第1・2面検出時には、須恵器と同量以上の土師器が出土したが、遺存状態が悪く、図化できるものは少なかった。器種としては、高台付壺・环・高环・鉢・甕などと、黒色土器、製塙土器などがある。

70・71は内面に炭を塗り込んだ内黒の黒色土器で、70は低い高台が、71は高い高台が張り付けられている。70は口径16.2cm、器高5.6cm、底径6cm。71は底径10cmで、2点とも平安時代前半期のものといえよう。内黒の黒色土器は細片が少量あるのみで、内外面黒色の黒色土器はない。

72は环で、内面および外面上半部はヘラミガキが施され、口縁端部は丸く仕上げている。高环の可能性もある。



Fig.59 第3面遺構分布状況

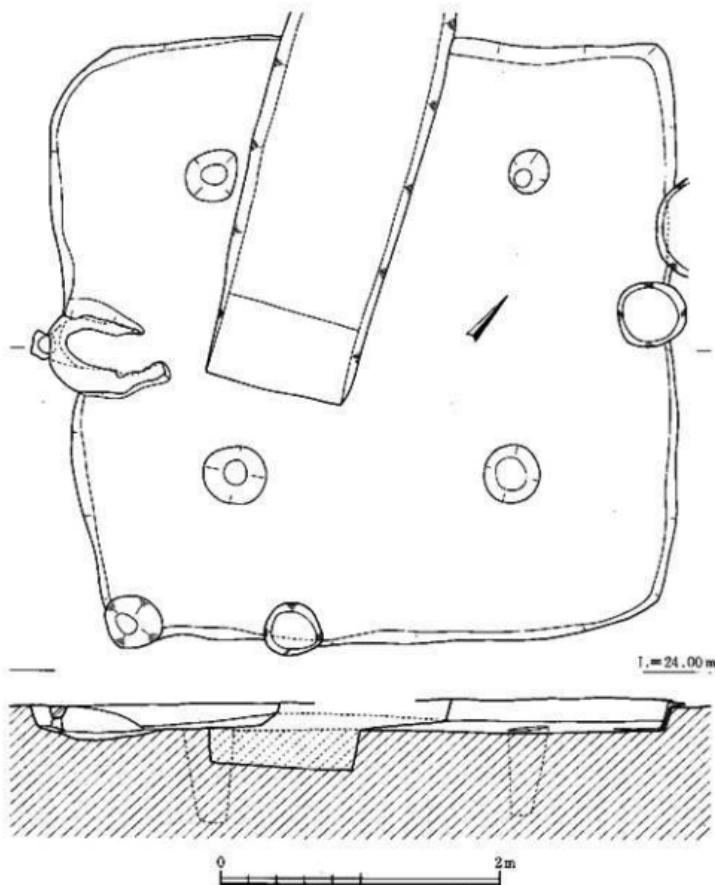


Fig.60 第6号竪穴式住居址 (SC-06) 実測図

74~76は高台付窓で、底径は比較的小さく、高台も低く、大きい口径をもつものである。74の口径は15.2cm、75・76の底径は6.6cm、8.1cmである。73は無高台窓で、外底に板状压痕が残り、底径7.5cmである。これらの窓・窓は平安時代の前半期のものと後半期のものがある。

77は手捏ねの高環形土器である。古墳時代後半期のものか。

78~80は甕で、くの字状口縁をもち、外面胴部はハケメ調整、内面の屈曲部ドはヘラケズリ

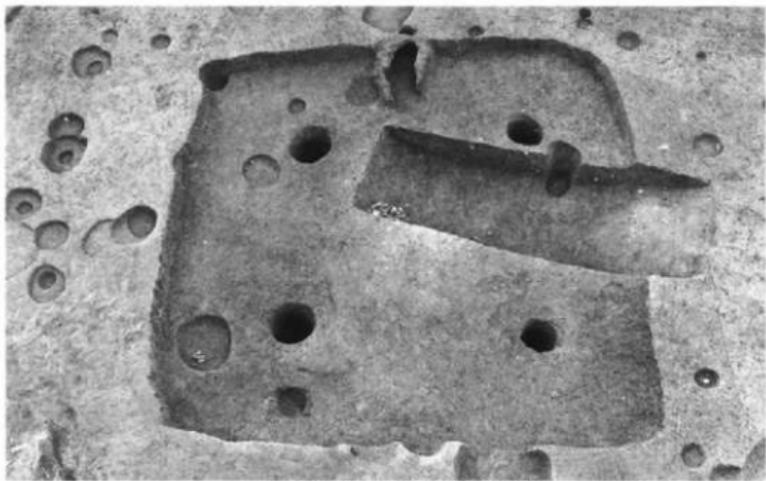


Fig.61 第6号竪穴式住居址完掘状況

が施されている。口径は20.2cm、16.8cm、26.5cmである。

以上のはか、瓶(81等)、移動式窓、製塙土器(玄海灘式)などの細片が出土している。出土土器は6世紀末前後のものが少量で、8世紀後半から平安時代終末期のものが大部分を占めている。

以上の須恵器・土器のほかに越州窑青磁などの青白磁や綠釉陶器が出土している。これらの遺物については結章にて述べる。

3. 第3面の調査 (Fig. 6・59)

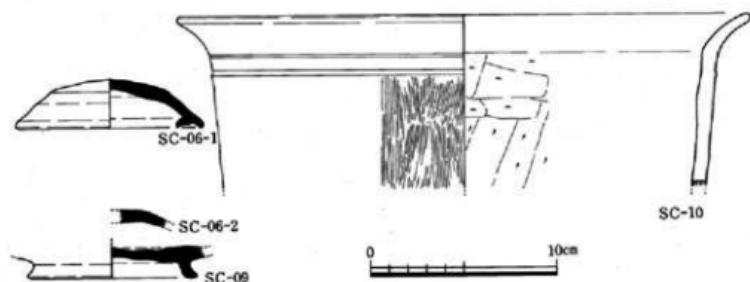


Fig.62 竪穴式住居址出土土器実測図

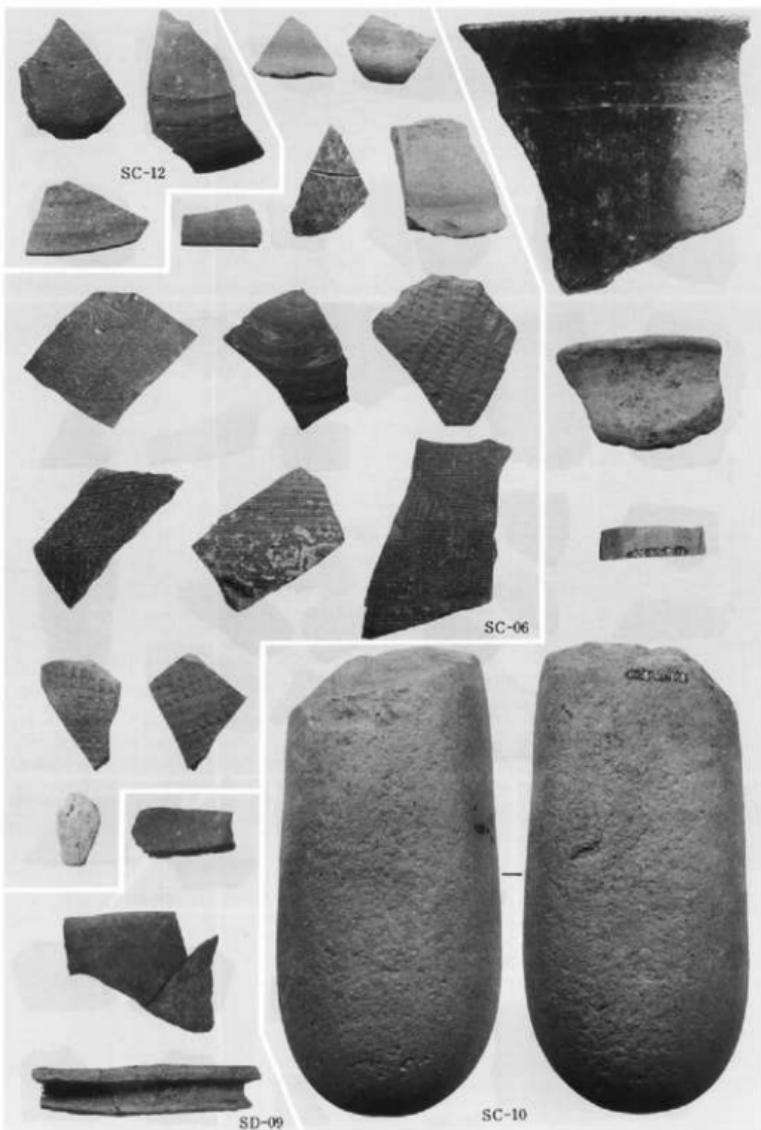


Fig.63 各竪穴式住居址出土遺物

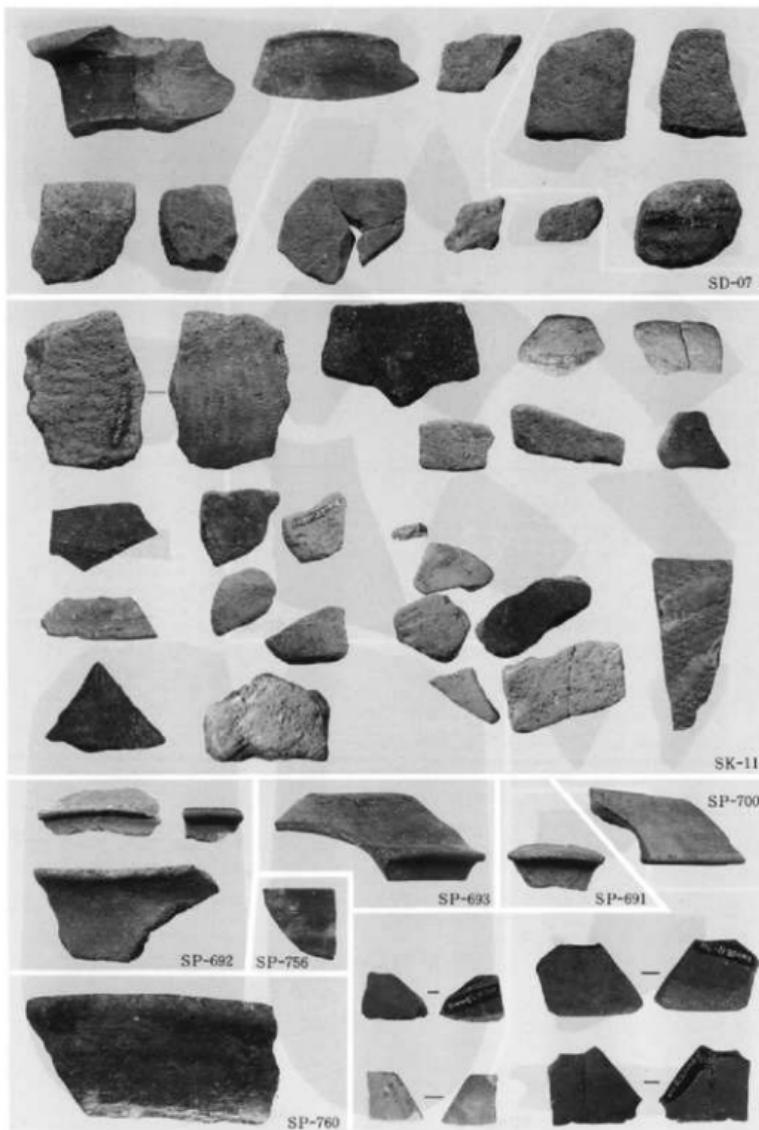


Fig.64 第3面各遺構出土遺物

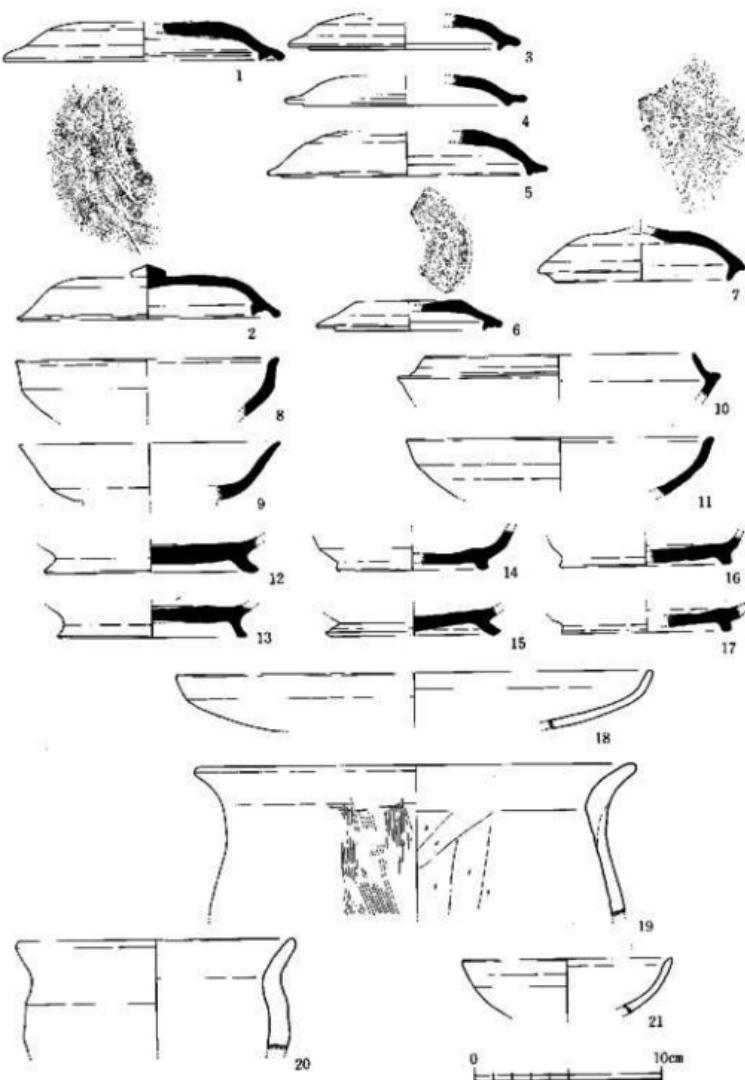


Fig.65 第3面検出時出土遺物実測図

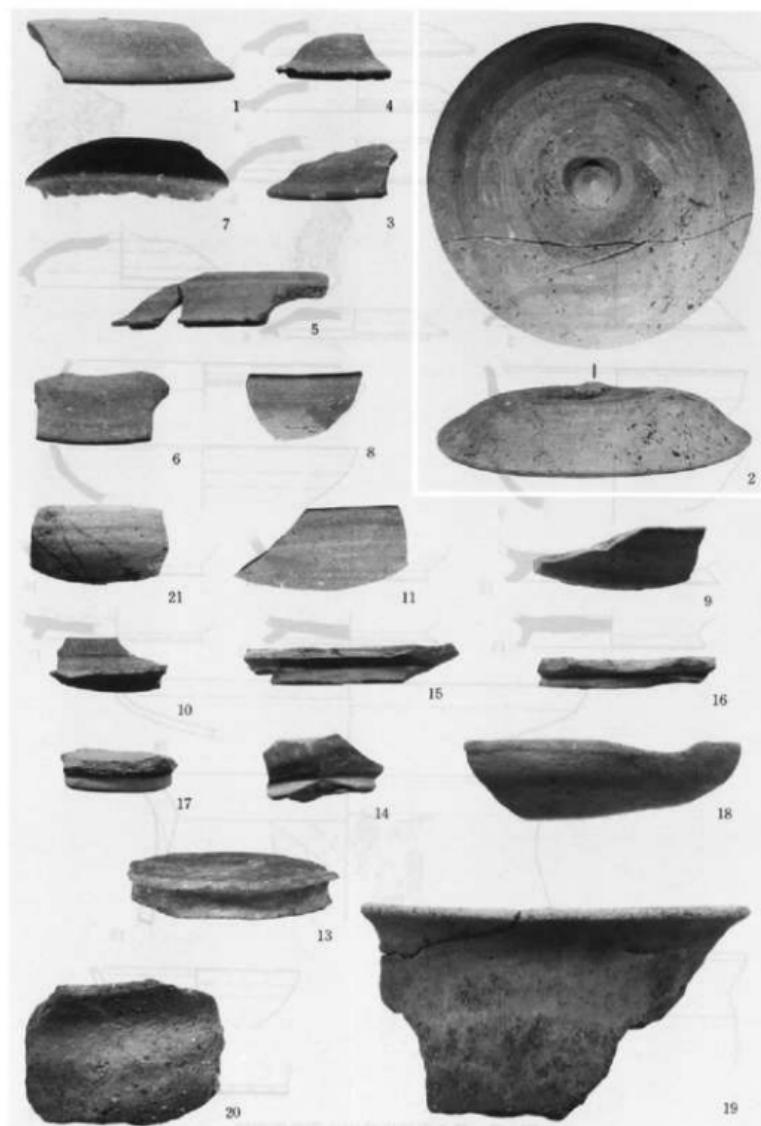


Fig.66 第3面検出時出土土器

第3面は前述したように、標高23.9m前後の黄褐色粘質土の上面で調査区の西側で調査を実施した。検出遺構としては堅穴式住居址6基(SC-06・10・12~15)、掘立柱建物1基(SB-106)、土壙2基(SK-09・11)、溝3条(SD-07・08・16)と柱穴多数がある。

1) 堅穴式住居址と出土遺物 (Fig.60~63)

6基の住居址のうち、3基に竈の付設がみられる。他の住居址も竈の付設があったと考えられる。いずれも平面形方形から隅丸方形であるが、遺存状態はSC-06を除いて悪い。

SC-06は一辺4.3m前後の隅丸方形を呈し、20cm強遺存しているが、試掘溝によって一部破壊されている。床面は平坦に叩き締められており、壁はほぼ直に立ち上がっている。西辺の中央部に竈を付設している。竈は黄白色粘質土で固めて造っており、焚口幅は20cmで奥行80cm、内幅は30cm強、煙道径15cmと遺存状態は良いが、受け部は崩壊している。4本柱を主柱穴としている。本住居址からは、須恵器の环蓋・甕などの細片が出土した。1・2は有返しの环蓋で、天井部にヘラ記号が記されている。以上から、本住居址は7世紀中葉前後のものか。

他の住居址も出土遺物は少ないが、同形態をとること、SD-16を切っていることなどからSC-06とはほぼ同様の時期のものといえよう。

2) その他の遺構と出土遺物 (Fig.63・64)

SB-106は地山整形に接した形で営まれている。桁行3間、梁行2間の純柱建物としたが、2×2間の建物が西側に連続している可能性も考えられる。SD-07・08は建物の布掘りと考えられる溝で、SB-106はこれを切っていることから、7世紀後半から末にかけてのものといえよう。

SD-16は幅1.6m前後の溝で、南にいくにしたがって深くなり、南側では60cm前後遺存している横断面は逆台形の溝である。出土遺物から6世紀後半から7世紀前半の集落区画の溝か。



Fig.67 その他の出土遺物

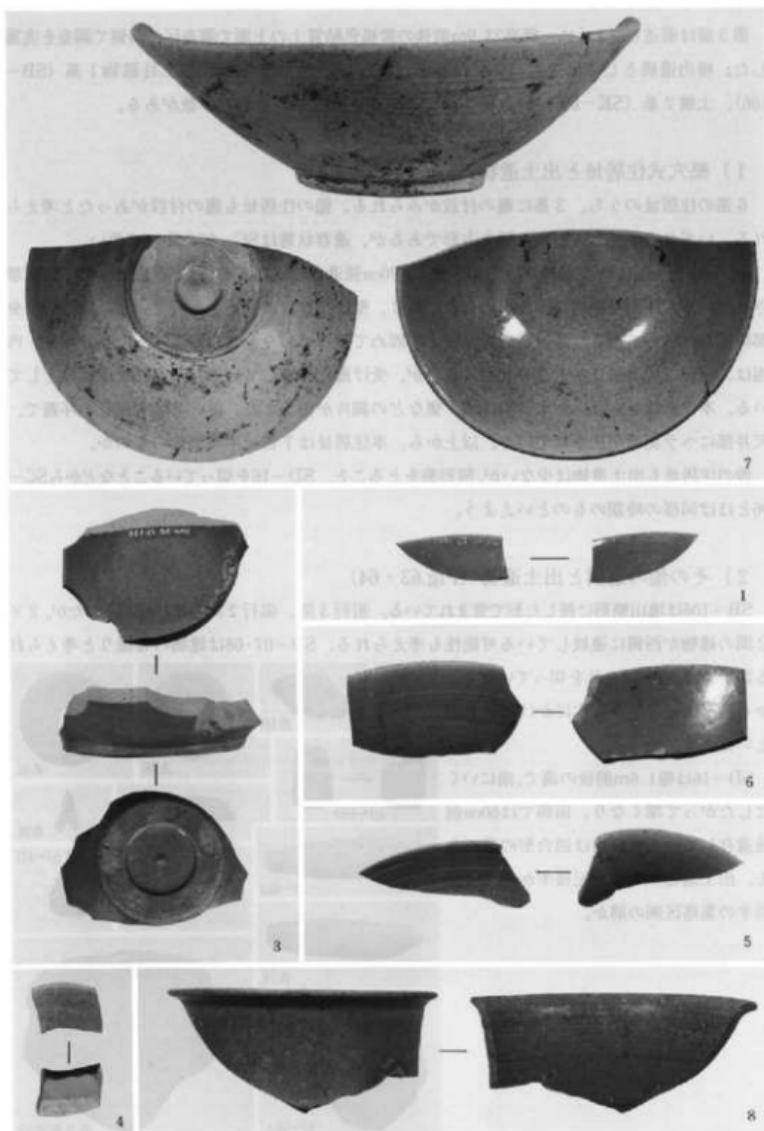


Fig.68 出土越州窯青磁・邢州窯白磁

第3章 結章

1. 出土陶磁器について

〔平安時代前半期〕 ピットおよび包含層から、越州窯青磁21片と邢州窯白磁1片を検出した。

越州窯青磁は、破片の観察から16個体分と推定でき、ピットから検出した3片を除いて包含層からの出土である。器種は、碗10、皿5、壺1とみられる。

1は極めて小片であるが碗の口縁部で、白灰色の胎土に淡緑色透明釉が薄くかけられている。SP-344出土。2は八輪花皿で、口径14.3cm、口縁を外反し、体部中位で緩く反転し、輪高台は低く削り出されている。輪花は鋭く切り込み縦線を彫る箇所と、切り込みが緩くそれに対応する線を入れない部分を交互に配しているようである。内底の側面よりに西線を巡らしている。釉薬は暗緑色であるが、黄色の粉がふいたように発色している。総軸で、高台付は施釉後ふき取られ、黄灰色の砂が敷かれて付着し、また、糸切りの痕跡も認められる。平坦な外底にも施釉されているが、3カ所に砂が付着する。内底には直径7cmほどの輪状の目跡があり、釉薬が剥ぎ取られ砂粒が付いている。SP-141出土。3は平壁型高台の碗で、暗黃色の釉薬が滑らかに内外のすべてにかけられている。胎土は褐色をおびた灰色の精製土である。高台幅1.2cm、抉り

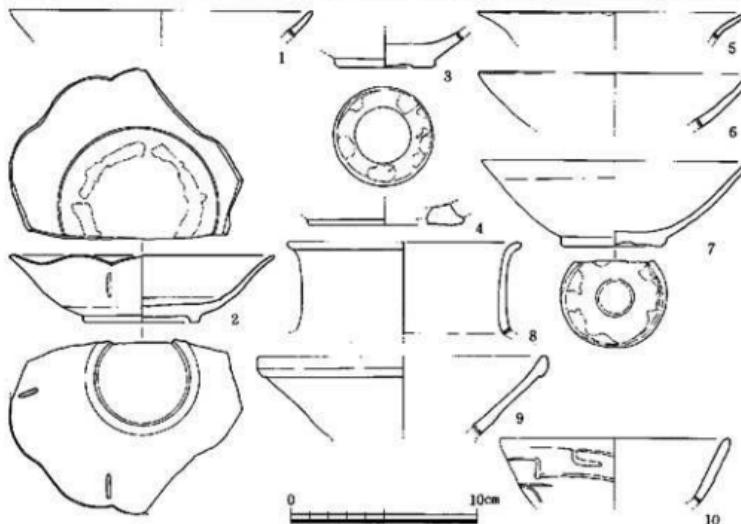


Fig.69 出土青白磁実測図

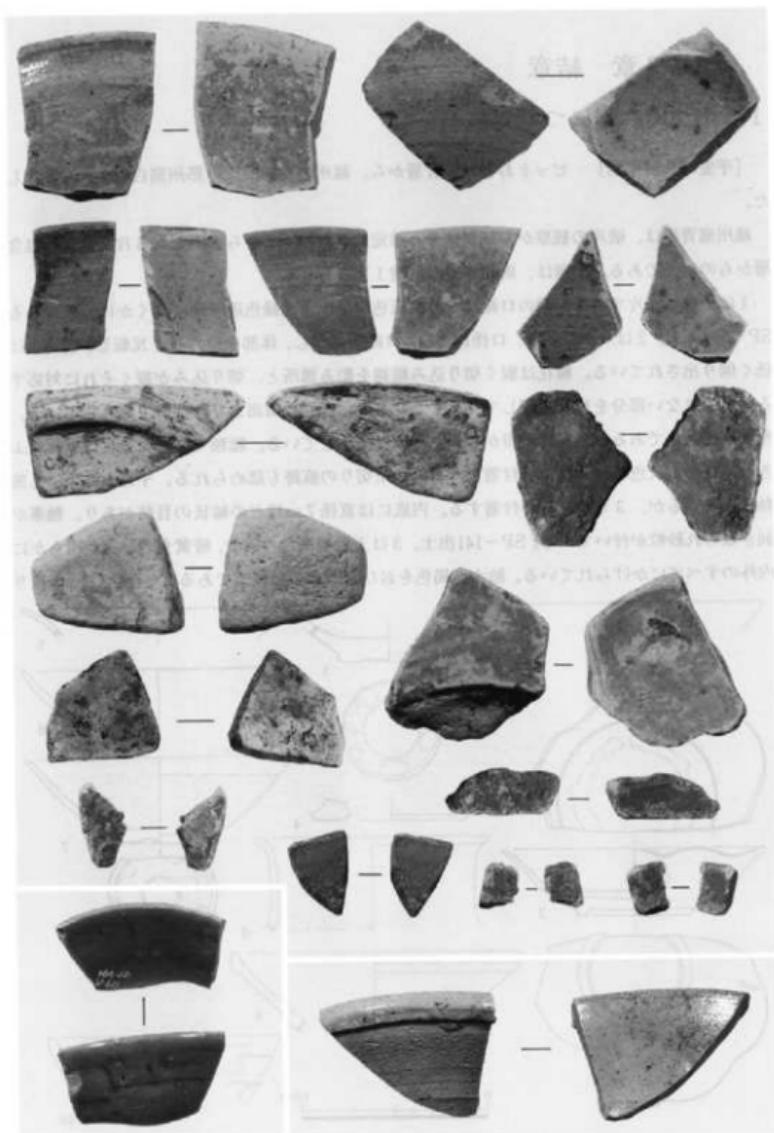


Fig.70 出土緑釉陶器および白磁

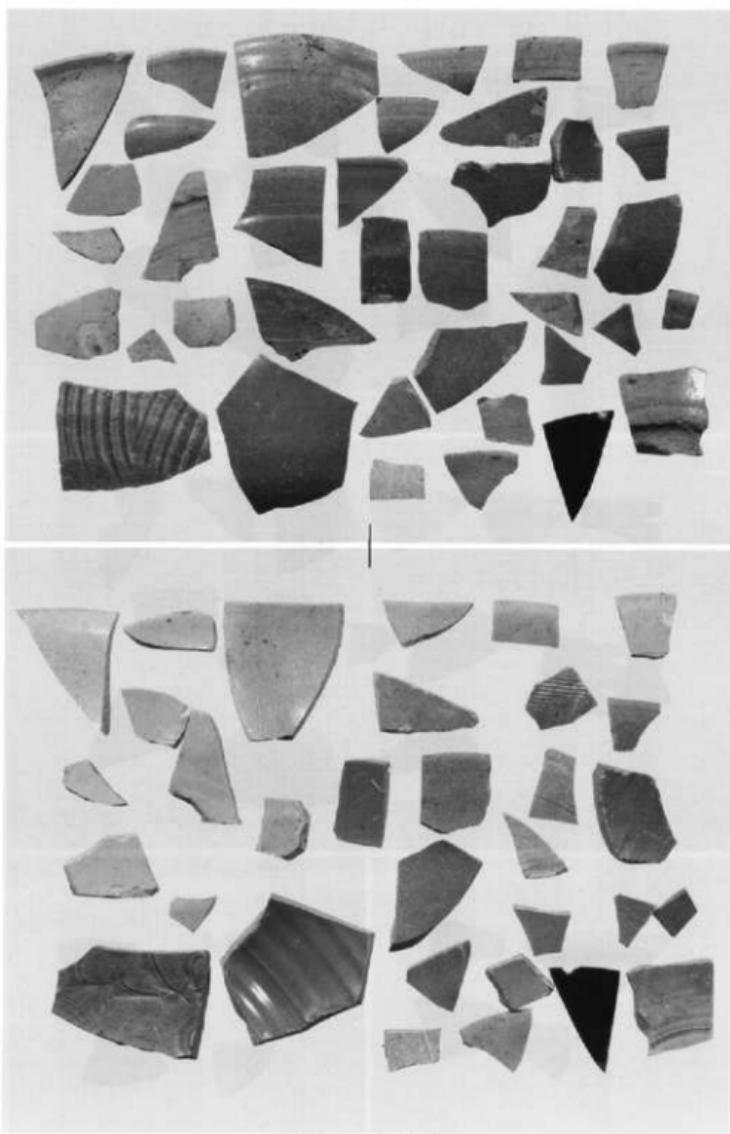


Fig.71 出土青白磁(1)

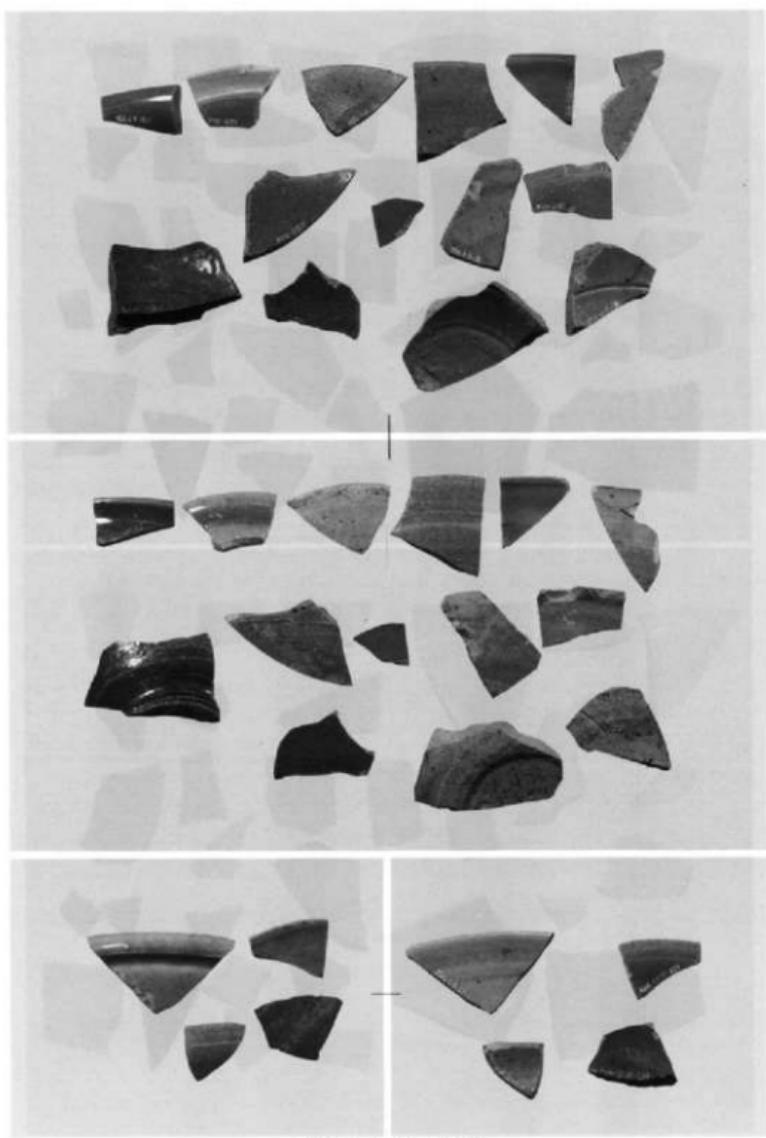


Fig. 72 出土青白磁(2)

は1mmと浅く、疊付に5カ所褐灰色の砂がつき、擦痕が認められる。外底中心にヘソ状突起があり、内底にはいわゆる鏡はない。SP-588出土。

以下5~8の越州窯青磁および図示していないその他の破片はすべて包含層の出土である。5は2と同じ皿とみられ、小片ではあるがわずかに輪花の一端が残る。暗黄緑色釉薬が薄くかけられているが、ややカセた感じである。このほかに輪花皿が1片ある。6は碗の口縁部で、灰色の胎土に淡黄緑色の釉薬がかかり口唇部は釉薬が薄くカセている。7は、ほぼ半裁分が残存する玉璧型高台の碗である。体部は直線的にのばし、口径14.2cm、底径5.5cm、高さ4.5~4.7cmと小振りである。高台の削り出しへは半面は段がつく。高台幅は1.6~1.8cm、やや内窪みで、抉り部分の中心は小さく突起状に削り残している。釉は緑黄色であるが黄色に近い透明で、冰裂はないが、発津とみられる黒斑点がかなり付着している。11唇の釉薬は特に薄くカセた状態になっている。内底には目跡ではなく、外底にはほぼ連続して灰色砂が5カ所以上にわたってつき、焼成後この目跡を研磨したため高台周縁部は釉薬が剥ぎ取られて灰色の胎土が露われている。8は口径12.5cmとやや大きいので、壺の破片とみる。直立する口頭部で、内外に黄緑色の釉薬が薄くかけられ、全面に細かい冰裂がみられる。胎土は灰色でやや粗い。

4は邢州窯白磁の高台部分の小片で、疊付と施釉された内抉り部分がわずかに残るにすぎない。釉薬は純白で冰裂もなく非常に美しい発色をしており、胎土はわずかに赤みをおびた褐色である。露胎の疊付には無数の擦痕が認められる。小片であるが復元底径が8cmとやや大きい。

これらの初期貿易陶磁器をみると、碗では下壁高台の形態で、輪高台は検出していない。玉璧高台の生産年代は、中国の紀年鉛資料に基づくと、8世紀第3四半期から9世紀の第3四半期の、おおよそ1世紀間に限られ、870年代には輪高台が主流を占めているようである。したがって、本遺跡のこれら初期貿易陶磁器もこの年代間にもたらされたと考えられる。図示できない綠釉陶器の小片10片以上を検出している。皿と碗で、すべて土師器質である。

〔平安時代後半以降〕 12世紀から14世紀代までの中国陶磁器約35片を検出している。9は白磁玉縁碗で、釉薬は淡褐色、ピンホールが多く、体部下半の露胎部分は赤みをおびた褐色を呈する粗質品である。これに、白磁ではやや小型の玉縁碗、端反り碗、竈泉窯青磁竈東第2期タイプの碗、同安窯系青磁碗など12世紀の陶磁器が共伴している。破片の大部分はこの時期のものである。

13世紀前半代の陶磁器はみられないが、後半から14世紀代のものとして、10の雷文(回文)帶蓮弁文碗がある。口径12.3cmと小型で、緑色透明釉がかかり、不鮮明ながら口縁に回文帯を巡らし、その下に幅の広い蓮弁文の一端がわずかに残っている。他に青磁壺の破片もある。

2. 立花寺遺跡第2次調査から

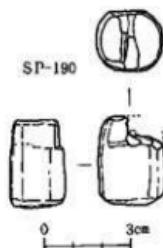
本調査では、古代の掘立柱建物と古墳時代後期の竪穴式住居址から構成される集落を検出した。これらの時期の集落は、月隈丘陵の中央部でははじめての調査である。

古代の掘立柱建物群はN-52'-E前後の方位をとるものと、それ以外の方位をとるものがある。第104号掘立柱建物とSB-102は柱筋がとおった形で配列されていること、A・B・Cの3棟は総柱の倉庫と考えられること、2条の柵列をもっていることなどから一般集落とは考えられない。第1・2面の各造構などからの出土遺物のなかに、越州窯青磁・邢州窯白磁、縁軸陶器、軒瓦(調査中粉失)・道具瓦などを含む瓦類、椎(Fig.73)など一般集落では出土しないものも含まれている。遺構配置と出土遺物から寺院の可能性も考えたが、建物が倉庫群と考えられることから官衙、または豪族居館と推定した。江戸時代後半期の青柳種信は、「筑前国續風土記拾遺」の席田郡上月限の項に、蓮田駅(『古今著聞集』)=久爾駅という試論で述べている。蓮田駅は現在でもどこにあったか定かでないが、本調査検出の掘立柱建物群、出土遺物は、駅跡および駅周辺に位置していることを想定できるのではないだろうか。

古墳時代後期の竪穴式住居址からなる集落のあり方は、月隈丘陵中央部西斜面の群集墳からなる墓地遺跡と大きく異なっている。持田ヶ浦古墳群など標高15m前後から、群集墳が営まれているのにもかかわらず、標高25m前後の丘陵地に所在する立花寺遺跡が居住領域として使用されていることは特異である。

本遺跡では縄文時代の蛤刃石斧、打製石鎌、弥生時代前期から中期前半にかけての土器や石器が出土している。弥生時代の遺構が遺存していた可能性はあるが、調査の時間的制約があり、調査を断念した。

古墳時代後期以降の各造構は地山整形をし、客土によって整地したあとに営まれている。このことも本遺跡が一般集落でないことを傍証となる。



立花寺 2

—第2次調査報告—

1993年（平成5年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印刷 大野印刷株式会社